

来 美 南 遺 跡

山代住宅新築工事に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年8月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

くる み みなみ
来 美 南 遺 跡

山代住宅新築工事に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年8月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　言

1. 本書は、財務省中国財務局の依頼を受けて松江市教育委員会と財團法人松江市教育文化振興事業団が平成21年度に実施した山代住宅新築工事に伴う来美南遺跡発掘調査の報告書である。
2. 調査は平成21年4月15日～平成21年5月29日にかけて行い、開発面積2,475m²、調査面積156m²である。
3. 調査組織は下記のとおりである。

主体者	松江市教育委員会	教　育　長	福島　律子
"		理　事	友森　勉
"	文化財課	課　長	吉岡　弘行
		係　長	飯塚　康行
		副　主　任	徳永　隆

実施者	財團法人松江市教育文化振興事業団	理　事　長	松浦　正敬
		常　務　理　事	松浦　克司

(事務局長兼務)

"	埋藏文化財課	課　長	廣江　眞二
		課　長　補　佐	錦織　慶樹
		調　査　員	石川　崇(調査担当者)
		調査補助員	大西　総司

4. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々の多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
酒井 哲弥(国立大学法人島根大学総合理工学部地球資源学科准教授) 西尾 克己(島根県教育庁文化財課古代文化センター) 林 健亮(島根県教育庁文化財課) 池淵 俊一(同)
佐伯 純也(財團法人米子市教育文化事業団 埋藏文化財調査室)

5. 本書中の挿図中の方位は世界測地系の第Ⅲ座標系X軸方向を指しており、磁北より7°20' 真北より0°31' 東の方向を示している。
6. 本書の作成には主に以下の者が携わった。

[遺物の実測] 石川 崇、田中 基次、善家 幸子

[遺構・遺物の浮遊] 石川 崇

[拓　本] 坂本 玲子

[写真撮影] 石川 崇

[執筆・編集] 石川 崇、徳永 隆

7. 本書掲載の出土遺物に関して、土器は1/3、瓦1/4で掲載している。

8. 出土遺物・実測図・写真等は松江市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査成果	
第1節 調査の概要	7
第2節 土層堆積状況	8
第3節 検出遺構	10
第4節 出土遺物	11
第4章 小 結	20
別表1 出土瓦分類別計測表	22
別表2 出土遺物一覧表	23

図 版



第1図 島根県位置図

挿図目次

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 第1図 島根県位置図 | 第9図 試掘調査時出土遺物 実測図（1） |
| 第2図 松江市位置図 | 第10図 試掘調査時出土遺物 実測図（2） |
| 第3図 周辺の地形と来美南遺跡・来美廃寺位置図 | 第11図 第1遺物包含層出土遺物 実測図（1） |
| 第4図 周辺の遺跡位置図 | 第12図 第1遺物包含層出土遺物 実測図（2） |
| 第5図 調査区位置図及び試掘トレンチ位置図 | 第13図 第2遺物包含層出土遺物 実測図（1） |
| 第6図 土層断面図 | 第14図 第2遺物包含層出土遺物 実測図（2） |
| 第7図 調査成果図 | 第15図 第2遺物包含層出土遺物 実測図（3） |
| 第8図 SX-01実測図 | 第16図 第2遺物包含層出土遺物 実測図（4） |
| | 第17図 第3遺物包含層出土遺物 実測図 |

図版目次

- | | |
|----------------------|------------------------|
| 図版1 調査前全景（西北から） | 図版10 第2遺物包含層出土遺物（2） |
| 調査前全景（北東から） | 図版11 第2遺物包含層出土遺物（3） |
| 図版2 遺物出土状況（軒平瓦） | 図版12 分類別出土平瓦（実測図未掲載資料） |
| 遺物出土状況（軒丸瓦） | |
| 遺物出土状況（須恵器・軒平瓦） | |
| 図版3 東壁土層断面（西側から） | |
| 南壁土層断面（西側から） | |
| 図版4 第1遺物包含層除去後（南側から） | |
| 第2遺物包含層除去後（南側から） | |
| 図版5 SX-01検出状況（南側から） | |
| SX-01土層断面（東側から） | |
| SX-01完掘状況（南側から） | |
| 図版6 完掘状況（北側から） | |
| 完掘状況（南側から） | |
| 図版7 試掘調査時出土遺物 | |
| 第1遺物包含層出土遺物（1） | |
| 図版8 第1遺物包含層出土遺物（2） | |
| 図版9 第2遺物包含層出土遺物（1） | |



第2図 松江市位置図

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年度、財務省中国財務局から山代町字来美地内で共同住宅を建設するため、開発予定地内における遺跡の有無について松江市教育委員会に照会があった。これを受けて平成21年2月に松江市教育委員会が試掘調査を実施し、古代・中世の遺物を多量に含む遺物包含層の存在を確認した。

さらに遺物包含層の広がりを調べるために、同年3月に追加の試掘調査を実施し、帶状にのびる遺物包含層の範囲が確認できたため、新たな遺跡として来美南遺跡と命名し、今後の取り扱いについて協議することとなった。

協議の結果、建設計画の変更は困難であるとのことから、工事により影響を受ける遺跡の範囲について事前の発掘調査を実施することとなり、平成21年4月から5月にかけて発掘調査を実施している。

なお、調査に先立つて県教育委員会から、この遺跡が国史跡である山代郷北新造院跡（来美庵寺）に近接しており、これに関連する施設跡等が存在する可能性も考えられるため、調査については慎重に行うよう指導を受けた。

第2節 発掘調査の経過

平成21年4月15日　調査開始。重機による表土及び搅乱土の除去を行う。

平成21年4月16日　調査区周辺に排水用溝を掘る。調査区中央に上層観察用の畦を設定し、東側を1区、西側を2区とした。

平成21年4月20日　遺物包含層が3層にわたって存在することが確認される。

平成21年5月7日　調査区内の第1遺物包含層の掘削を終了する。

平成21年5月13日　調査区内の第2遺物包含層の掘削を終了する。

平成21年5月14日　島根大学総合理工学部地球資源学科准教授の酒井哲弥氏による調査指導会。

平成21年5月15日　島根県教育庁文化財課による調査指導会。（現地）

平成21年5月19日　島根県教育庁文化財課による調査指導会。（遺物）

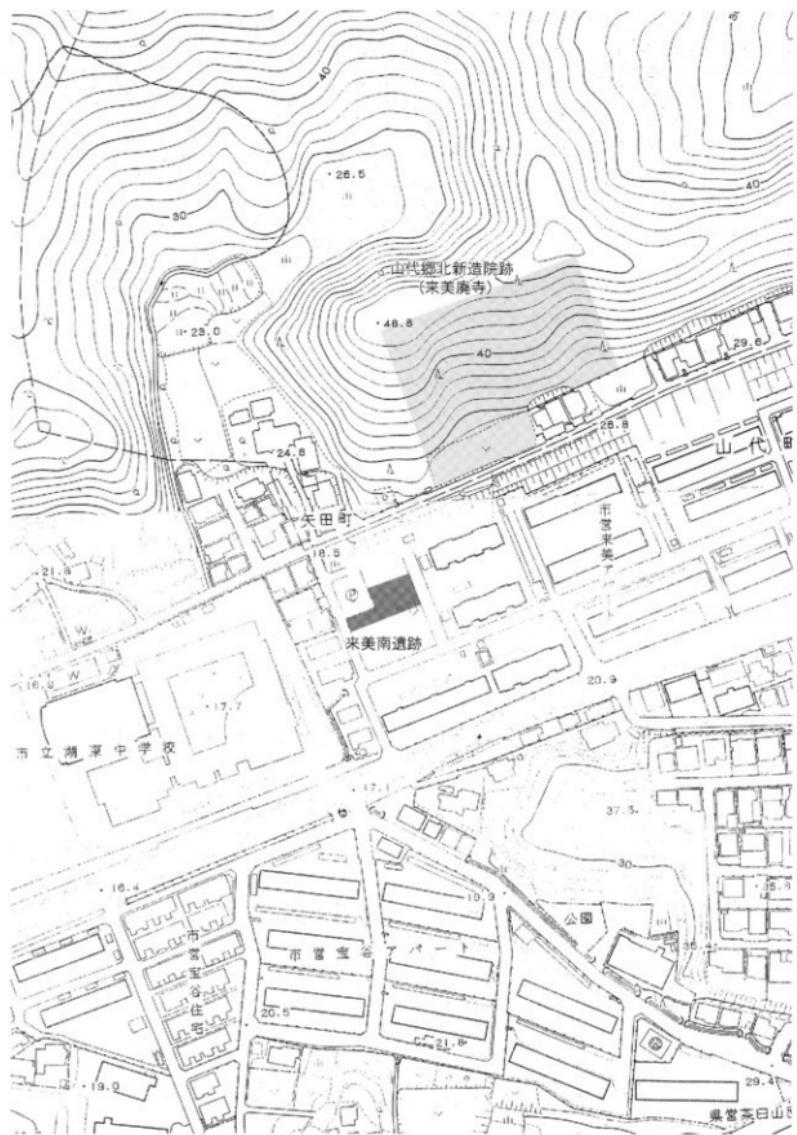
　　第3遺物包含層及びS X - 0 1を完掘する。

平成21年5月20日　調査終了後の測量及び写真撮影。

平成21年5月25日　調査区内に土砂を埋め戻す。

平成21年5月26日　概要報告書を提出する。

平成21年5月29日　現場を撤収する。



第3図 周辺の地形と来美南遺跡・来美庵寺位置図 (1/2,500 松江圏都市計画図より)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡は松江市街中心部より南東、松江市山代町字来美698-1番地に所在する。本遺跡の南側には『出雲国風土記』に「神名樋野」と記されている標高171mの茶臼山がある。その南側は意宇川が形成した沖積平野である意宇平野が広がっている。遺跡の北側は丘陵が広がり、さらにその北側には大橋川が東西に流れている。本遺跡はこのように茶臼山と丘陵に挟まれた谷状地形の中に位置する。谷状地形は東西方向に走り、東側から西側に向かって標高が下がっている。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては丘陵の北側の馬橋川流域に石台遺跡（2）が存在する。石台遺跡は馬橋川河川改修工事や国道9号線バイパスに伴って数度の調査が行なわれ、縄文時代から中世にかけて数多くの遺物が出土している。そのほかにも保地遺跡（3）などがある。

弥生時代になると確認されている遺跡が急増する。石台遺跡からは中期後葉～後期初頭にかけての集落跡が確認されている。また石台遺跡から100m東側の別の丘陵にある勝負遺跡（4）からは弥生時代後期前半～古墳時代中期までの集落跡が確認されており、両遺跡は続縦的な関係にあったのではないかと考えられる。長峯遺跡（5）からも弥生時代中期末～後期前葉頃の住居跡が確認されている。また平所遺跡（6）からは弥生時代～古墳時代初頭にかけての長作工房跡が検出されている。墳墓では後期に属する四隅突出型の来美墳丘墓（7）や間内越墳丘墓群（8）がある。来美墳丘墓は墳頂部に7つの埋葬施設を持ち、間内越墳丘墓群は4基の墳丘墓が確認されている。両者は茶臼山の北東山裾にあり、距離的にも600mほどしか離れておらず、関連性が考えられる。

古墳時代には集落遺跡として中期後葉の堅穴建物跡が検出された寺山小田遺跡（9）や中期の堅穴住居跡とそれに付随すると考えられる掘立柱建物跡が検出された矢田平所遺跡（10）がある。前期の古墳としては意宇平野の北側に小型の方墳である社日1号墳（11）があり、鉄製農耕具など多数の副葬品が出土した。また茶臼山の東側に出雲最古級の前方後円墳である廻田1号墳（12）があり、同時期では出雲中央部で最大級の規模を有するものである。中期になると大橋川流域を中心に多くの大型古墳が出現する。石屋古墳（13）は造山部を持ち、形象埴輪や須恵器などが出土している。手間古墳（14）は全長約70mの前方後円墳、井ノ奥4号墳（15）は大型の前方後円墳で、円筒埴輪や朝顔形埴輪、鶏形埴輪などが出土している。また前方後方墳の岩舟古墳（16）や方墳の荒神畠古墳（17）、などがある。後期になると茶臼山の西側を中心に大型の古墳が作られる。茶臼山の北西側には方墳の大庭鷄塚古墳（18）があり、円筒埴輪や須恵器が出土している。その東側にある山代二子塚古墳（19）は出雲地方最大の前方後方墳で円筒埴輪や子持壺が出土した。このほか石棺式石室を持つ方墳の山代方墳（20）、規模が不明ながら石棺式石室をもつ永久宅後古墳（21）、方墳で石棺式石室をもつ向山1号墳（22）は子持壺や馬具や大刀金具が出土した。茶臼山の南西側には前方後方墳で横穴式石室をもつ岡田山1号墳（23）がある。この古墳の石室から鏡や武器、装身具、馬具などの副葬品が出土した。またその中の円頭大刀の刀身から「額田部臣」の銘文が確認されている。これ以外にも前方後方墳の

御崎山古墳（24）からは武器や馬具、鏡のほか、須恵器などが出土した。また前方後円墳の東淵寺古墳（25）、規模が不明な岩屋後古墳（26）や団原古墳（27）などが存在し、この周辺は県内でも大型古墳が密集する地域の一つである。

また横穴墓も多く見られ、茶臼山の北東山裾にもつくられている。十王免横穴群（28）は37穴が確認され、須恵器や土師器のほか、鉄器、玉類なども出土した。論田横穴群（29）は5穴が確認され、須恵器のほか、耳環や鉄鎌などが出土した。中竹矢遺跡（30）では5穴確認されている。これら以外にも喰ヶ谷横穴群（31）や狐谷横穴群（32）が存在する。

律令時代になると意宇平野周辺に政治的な中枢機能を持つた施設が現れる。意宇平野の南側には出雲国府（33）が造られる。出雲国府は、律令政治下の地方での政治・行政を行った場所である。発掘調査の結果、正殿の後に配置される後殿や後方官衙群と思われる建物群跡が確認されている。

また茶臼山の南西に出雲国山代郷正倉（34）がつくられる。「正倉」とは古代の租税である米を収める倉庫のことと、調査の結果、掘立柱建物跡や縦柱建物跡が確認され、倉庫群や管理棟と推測されている。また正倉跡に隣接する黒田館跡（35）や下黒田遺跡（36）からも正倉の一部と思われる遺構が検出された。

これ以外には出雲国分寺（37）や出雲国分尼寺（38）が意宇平野の北東に造られる。国分寺・国分尼寺は聖武天皇の詔によって全國に作られた寺院で、発掘調査の結果、国分寺跡では主要な建物跡が検出されたほか、寺域の北限・南限・東限が確認された。国分尼寺跡では、顯著な遺構は検出されなかつたが、多くの遺物が出土した。

本遺跡と最も関係があると思われるのが山代郷北新造院と呼ばれる来美廃寺（39）であり、本遺跡の北東側に位置する。『出雲國風土記』には「新造院」と書かれた寺が10箇所あり、そのうち山代郷北新造院は「日置君自烈ひきの さち めづら」が建立したと記されている。発掘調査の結果、金堂の両側に塔を建てていたことが判明した。また全国的に珍しい石製の相輪が出土した。

また茶臼山の南側に四王寺跡（40）がある。ここは『出雲國風土記』で「出雲臣弟山」が建立した山代郷南新造院と考えられている。調査の結果、建物基壇が確認されている。この四王寺跡の南西に南新造院の瓦を生産したと思われる窯跡小無田Ⅱ遺跡（41）がある。

この時期の集落跡としてオノ岬遺跡（42）や中竹矢遺跡がある。前者は8世紀中葉から後半を中心とした集落跡であり、祭祀関連遺物も出土している。後者は9世紀後半頃の掘立柱建物跡が検出されている。

中世遺跡としては12世紀代の白磁碗に伴って土師器皿が出土した中竹矢遺跡、同じく12~13世紀代の土師器が出土した石台遺跡などがある。また出雲国府では10世紀前半以降に遺構・遺物が減少し、11世紀代にはほとんど確認されなくなるが、12世紀に入ると再び陶磁器などが出土し遺構も確認されている。これは「古代国府」から「中世府中」への移り変わりを示している。また15~16世紀に機能していたと思われる茶臼山城跡（43）や15~16世紀代の可能性がある建物跡が確認された市場遺跡（43）などがある。

なお当地は戦前に陸軍の射撃訓練場として造成されており、所々にその痕跡をとどめる。



第4図 周辺の遺跡位置図（国土地理院 1/25,000）

- | | | | | |
|--------------------|-----------|--------------------|---------------|------------|
| 1. 来美南遺跡 | 2. 石台遺跡 | 3. 保地遺跡 | 4. 勝負遺跡 | 5. 長峯遺跡 |
| 6. 平所遺跡 | 7. 来美墳丘墓 | 8. 間内越墳丘墓 | 9. 寺山小田遺跡 | 10. 矢田平所遺跡 |
| 11. 社日1号墳 | 12. 回田1号墳 | 13. 石屋古墳 | 14. 手間古墳 | 15. 井ノ奥4号墳 |
| 16. 岩舟古墳 | 17. 荒神畠古墳 | 18. 大庭鶴塚古墳 | 19. 山代二子塚古墳 | 20. 山代方墳 |
| 21. 永久宅後古墳 | 22. 向山1号墳 | 23. 岡田山1号墳 | 24. 御崎山古墳 | 25. 東淵寺古墳 |
| 26. 岩屋後古墳 | 27. 団原古墳 | 28. 十王免横穴群 | 29. 論田横穴群 | 30. 中竹矢遺跡 |
| 31. 嘘ヶ谷横穴群 | 32. 狐谷横穴群 | 33. 出雲国府跡 | 34. 出雲国山代郷正倉跡 | |
| 35. 黒田館跡 | 36. 下黒田遺跡 | 37. 出雲国分寺跡 | 38. 出雲国分尼寺跡 | |
| 39. 山代郷北新造院跡（来美廃寺） | | 40. 山代郷南新造院跡（四王寺跡） | | |
| 41. 小無田II遺跡 | 42. 才ノ峠遺跡 | 43. 茶臼山城跡 | 44. 市場遺跡 | |

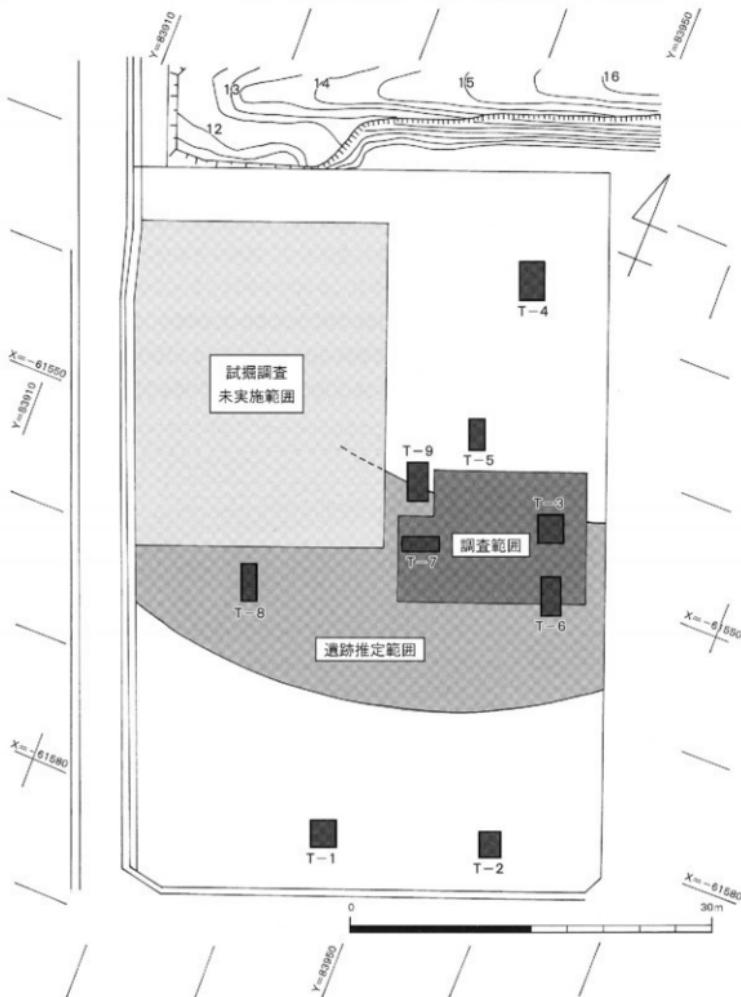
(参考文献)

- 『松江市遺跡地図』松江市教育委員会 1991年
- 『石台遺跡—馬橋川改修に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会 1986年
- 『中竹矢1号墳 長峯遺跡』松江市教育委員会 1987年
- 『一般国道9号松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IX』島根県教育委員会 1992年
- 『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書V』島根県教育委員会 1987年
- 山本 滉「松江市矢田町来美の四隅突出型墳丘」『間内越1号墳 間内越遺跡』松江市教育委員会 1987年
- 『寺山小田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1996年
- 『矢田平所遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 1993年
- 『井口古墳』島根県教育委員会 2000年
- 『常設展示図録 古代出雲の中心意宇 八雲立つ風土記の丘の歴史と文化』島根県八雲立つ風土記の丘 2007年
- 『松江市東部における古墳の調査』島根県教育庁古代文化センター 島根県教育庁埋蔵文化財センター 2004年
- 『史跡石巖古墳』松江市教育委員会 1985年
- 『松江市手間古墳発掘調査報告 薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室 2002年
- 『史跡大庭鶴塚発掘調査報告』松江市教育委員会 1979年
- 『石槨式石室の研究』出雲考古学研究会 1987年
- 『向山古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会 1998年
- 『出雲向山古墳』島根県教育委員会 1987年
- 曳野律夫・松本岩雄・内田律雄・三宅博士「松江市東源寺古墳測量報告」「島根考古学会誌第6集」島根考古学会 1989年
- 岡崎雄二郎「十王免横穴群」「八雲立つ風土記の丘周辺の文化財」島根県教育委員会 1975年
- 「狐谷横六群」「島根県埋蔵文化財調査報告第7集」島根県教育委員会 1977年
- 『諭田4号墳発掘調査報告書 付編 諭田殿横穴群概要報告』松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団 1994年
- 『一般国道9号線松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書X 中竹矢遺跡』島根県教育委員会 1992年
- 『島根県埋蔵文化財調査報告書 第13集』島根県教育委員会 1987年
- 『出雲国片跡発掘調査概報』松江市教育委員会 1970年
- 『史跡出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会 1981年
- 『黒田館跡』松江市教育委員会 1984年
- 『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 1988年
- 『出雲国分寺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会 2004年
- 『来美庵寺 「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』島根県教育委員会 2002年
- 『山代郷北新造院跡 史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院(来美庵寺)発掘調査報告書』島根県教育委員会 2007年
- 『国道9号線バイパス発掘調査報告書IV 才の峰遺跡』島根県教育委員会 1983年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書VI 茶臼山城跡 市場遺跡 内堀石塔群』島根県教育委員会 1990年

第3章 調査成果

第1節 調査の概要

本遺跡周辺はもともと山や丘陵に挟まれた谷であったが、後世、平坦地を造成するため、一部丘陵の削平と盛土をしたところである。調査地周辺は住宅地であり、また東側には生活道路があることか



第5図 調査区位置図及び試掘トレンチ位置図 (1/400)

ら、調査区と道路の間は安全面を考慮して2mの間隔をあけ、調査による掘削深度が2m近くになることが予想されたことから調査区の壁面に安全勾配を保ちながら、掘り進めることとなった。調査区の東壁面（A-A'）と南壁面（B-B'）を土層観察用の壁とし、あわせて調査区内の中央にも土層観察用の畦（C-C'）を残して、東側を1区、西側を2区として調査を行った。（第7図）

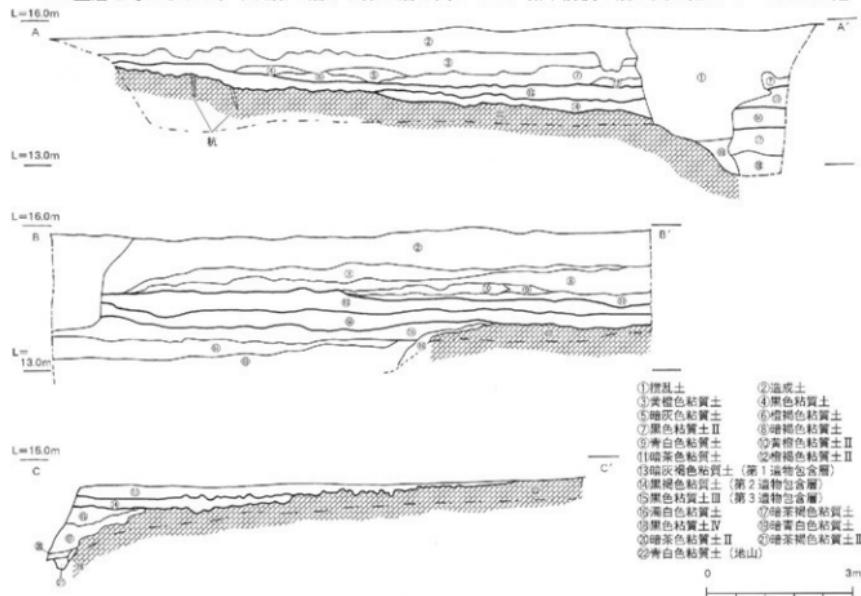
試掘調査の結果から表土直下約1.2m付近までは現代の擾乱によるものと確認されているため、慎重に重機による擾乱部分の掘削をおこなった。その下は手掘りによる調査を行い、遺構の有無の確認をし、遺物を取り上げながら、層毎に掘り下げていった。

調査の結果、3層にわたる遺物包含層と時期が不明な杭列、自然流路（S X-01）を検出した。

第2節 土層堆積状況（第6図）

調査地は、1947年の極東米軍の航空写真では完全な更地で、1962年に撮影された航空写真によると調査区付近は宅地であったことが窺え、共同住宅が建設されていた。第1層は住宅の浄化槽を撤去した際の擾乱土で、第2層もコンクリートなどを含む造成土で、建物等を壊した後、埋め戻されたと考えられる。

その下層は黄橙色粘質土である（第3層）。近所の方に話を聞いたところ、調査区の周辺一帯は戦前に沼地であったところに、土を盛って陸軍の射撃場を造ったということなので、その際の造成土がこの土層と考えられる。また第4層から第12層に関しても、礫や前後の層が入り乱れているため、造



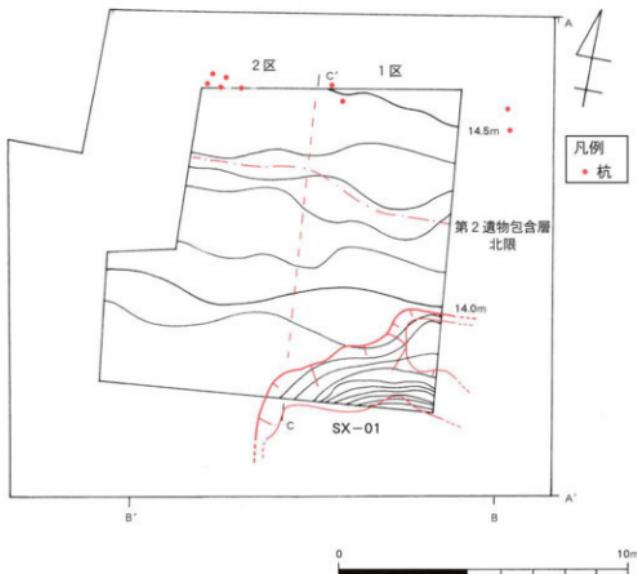
第6図 土層断面図 (1/100)

成土の一部もしくは造成時に伴う搅乱と考えられる。

第13層暗灰褐色粘質土は第1遺物包含層である。出土遺物は須恵器の壺・蓋・甕など、土師器の甕類等の小片や土製支脚など、また古代の瓦などが大量に出土した。この層は東壁の土層断面から調査区全域にわたって存在しているが、遺物は北側に少なく、南側に行くにつれて多く出土した。しかしこの包含層上面から掘り込まれた遺構は確認できなかった。出土遺物の中に近世以降の瓦片や近代の陶磁器が含まれていることから、近代以降に搅乱された可能性が高い。

第14層黒褐色粘質土は第2遺物包含層である。出土遺物は第13層と同じく、須恵器の壺・蓋・甕など、土師器の甕類等の小片や土製支脚など、また瓦などが大量に出土した。この第14層は第13層とは異なり、調査区全域にわたっては見られず、調査区の北側から約2.5m付近が北限になる。土層断面を観察すると、土層内の泥が引き伸ばされた状態になったり、筋状になったりして、中で変形を示す模様になっていることから軽度な土石流によって流れ込んできた土層と思われる。⁽¹⁾地形的な傾斜から考えて北側から南側にむけて流れてきたと思われるが、確証は得られなかった。この包含層上面からも遺構は確認できなかった。

第15層から第21層はSX-01の埋土である。このSX-01については第3節で後述する。第15層黒色粘質土は少量ながら遺物が出土したため第3遺物包含層とした。この第15層からは少量の須恵器片や土師器片、石などが出土したが、それ以下の層から遺物は出土しなかった。この第15層から第21層までは自然に堆積した層で、沼地や湿地帯によく見られる腐植土の堆積層と思われる。⁽²⁾



第7図 調査成果図 (1/150)

第22層青白色粘質土層は地山とした層である。この第22層の表面は上層の黒褐色粘質土（第14層）と混ざり合ってマーブル模様状になっていた。これは液状化現象によるもので、地盤の柔らかい第22層が上層の土石流による振動により、噴砂現象をおこしマーブル模様状になったものと思われる⁽³⁾。

この層の北側、上面から杭列が検出されたが、この層から打ち込まれたものは不明であり、南側からはSX-01の落ち込みが確認できた。

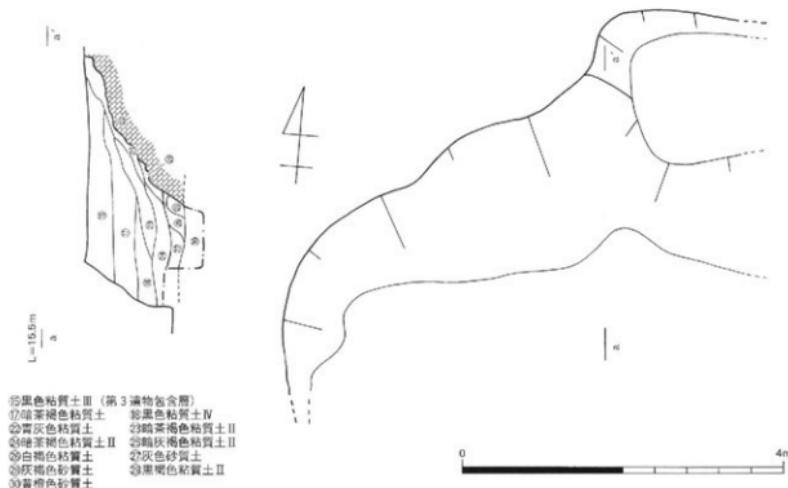
第3節 検出遺構

・杭列（第7図）

調査区の北側、地山（第22層）上面から長さ約9m、幅約1mの間に杭が西側に5本、中央部に2本、東側に2本、計9本が2列になって検出された。杭の頭部分はすでになく、先端部は鋭利な道具によって加工されていた。杭の太さは直径3cm～10cm、長さは確認できるもので10cm～50cm程度とばらつきがある。地山（第22層）の表面までは痕跡が確認できず、東壁上層断面に残っていた痕跡からも、どの層から打ち込まれたかはわからなかった。また杭列にはあまり規則性は感じられない。この杭列の性格、時期についてなど詳細については不明で、調査区北側はすでに削平されていた可能性が考えられるため、杭の頭部分がなくなってしまったと考える。

・SX-01（第8図）

調査区の南側約2mのところから、半円状に直径約5m程度検出された。現状として第8図の第22層青白色粘質土から落ち込みが観察でき、深さは約1.2mを測る。このSX-01が形成されたのは、まず第22層が地崩れを起こし、その際に小さな谷状地形がつくられ、その谷の部分に水が流れ、その



第8図 SX-01実測図 (1/60)

水の流れによって第22層が削られて砂質土が堆積したものと考えられる（第8図の第27・28層）^{〔4〕}。さらに下層は小さな砂利を含む橙色砂質土で、それが第22層の下に堆積している。以上のことからS-X-01は人工的な造構ではなく、自然流路と考えられる。また覆土から須恵器の甕の頭部片が1片と石、土師器の小片が数点出土した。

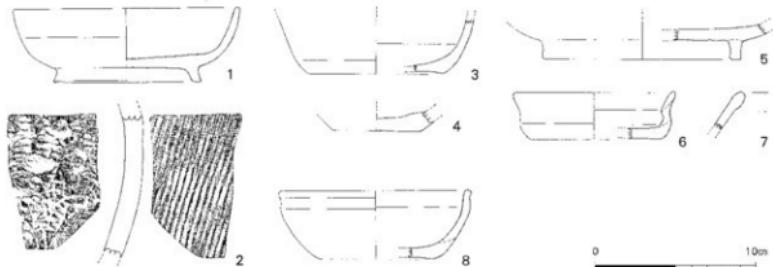
第4節 出土遺物

・試掘調査 試掘調査時に出土した遺物である（第9・10図）。

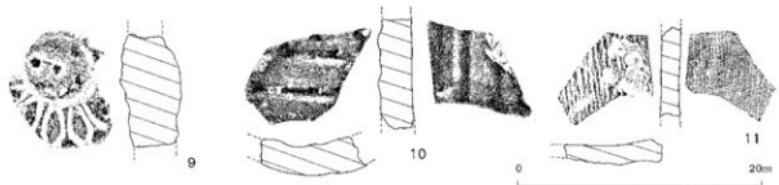
1・2はT-3から出土した須恵器である。1は高台付壺。外面胴部下にヘラケズリ痕が残り、外面胴部上と内面には回転ナデ調整が施される。底部はヘラによる切り離し後に高台を貼り付けている。2は甕の胴部片。外面は平行叩き、内面は同心円状の當て真痕が残る。

3・4はT-6から出土した。3は須恵器の壺の底部片。底部には回転糸切り痕が残る。4は皿形の土師質土器の底部片。全体的に摩滅が激しく、調整等は不明である。

5～7はT-7から出土した。5は須恵器の高台付壺の底部片。底部は回転糸切りによる切り離し後、ナデ調整を施し高台を貼り付けている。外面は回転ナデ調整を施す。6は須恵器の壺の口縁部～底部片。底部は回転糸切り痕がわずかに残る。器形は胴部中央で屈曲し、口縁部に向けて外反しながら立ち上がる。形状的には灯明皿とも思えるが、油煙の痕跡はなかった。外面には回転ナデ調整が施され、自然釉がかかっている。7は中国製の白磁碗の口縁部片。口唇部はやや玉縁状になり、釉薬は透明釉で、貫入が見られる。



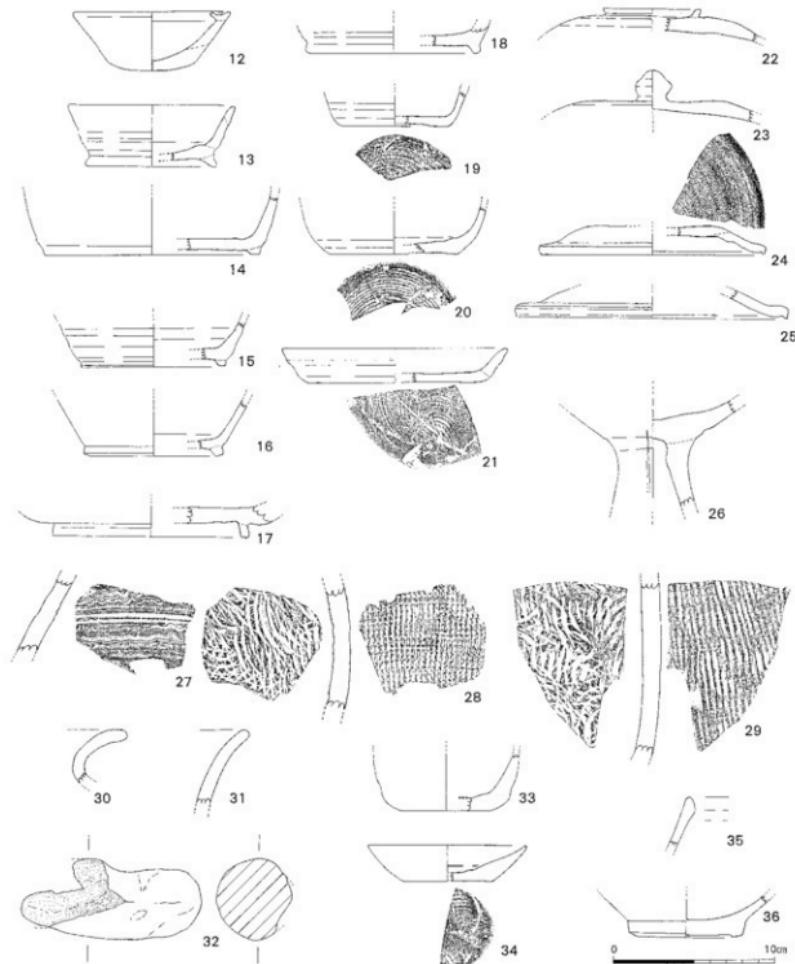
第9図 試掘調査時出土遺物 実測図（1）（1/3）



第10図 試掘調査時出土遺物 実測図（2）（1/4）

8はT-8から出土した須恵器の壺の口縁部～底部片である。形状は胴部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁部下あたりで若干のくびれを持つ。底部には回転糸切り痕がみられ、胴部内外面ともに回転ナデ調整を施す。

9～11はT-7から出土した瓦片。9は軒丸瓦。蓮子は痕跡から1+6が想定され、蓮弁は紡錘形を呈し、間弁には珠文の痕跡が、中房部には范傷痕が残る。10は軒平瓦。焼成が不十分で軟質のため、



第11図 第1遺物包含層出土遺物 実測図(1) (1/3)

表面の摩滅が激しく、明確ではないが、凸面に隆帯をもち、凹面には布目痕と模骨痕が残る。11は平瓦。凸面に直行する綱目痕が、凹面に布目痕があるが、模骨痕は見られない。凸面に指頭圧痕が見られ、凹面の端部は面取りされている。

・**第1遺物包含層** 第6図第13層から出土した遺物である（第11・12図）。

須恵器（第11図12～29）

坏（第11図12～20） 12は古墳時代の系譜を引く坏。短い立ち上がりと受部を有し、底部は丸底で、直径9.4cmと小さく小型化している。13～18は高台付坏である。13・14は底部をヘラによる切り離しの後、ナデ調整を施し、高台を貼り付けている。胴部には回転ナデ調整を施す。15～18は摩滅が激しいため、調整等は不明だが、切り離し後、再調整を行い、高台を貼り付けているものと思われる。胴部には回転ナデ調整を施す。19・20は高台が付かない坏の底部片。底部は回転糸切りによる切り離しで、胴部は回転ナデ調整を施す。

皿（第11図21） 形状は底径が大きく、器高は低い。外側にむけて開きながら、直線的に立ち上がる器形。底部は回転糸切りによる切り離しで、胴部は回転ナデ調整を施す。

蓋（第11図22～25） 22は輪状つまみを、23は擬宝珠状のつまみを有する。天井部はヘラによる切り離しの後、ナデ調整を施す。24・25は口縁端部が断面三角形状を呈し、回転ナデ調整が施されている。

高坏（第11図26） 高坏の坏部と脚部の縦目の部片。脚部の2方透かしが切れ目状になっている。

甕（第11図27～29） 27は頭部片。2条の沈線と波状文が施されている。28・29は胴部片。外面は平行叩き、内面は同心円状の当て具痕が残る。

土師器（第11図30～32）

甕（第11図30・31） 両方とも口縁部片。30は頭部が屈曲しながら口縁に向かって立ち上がるのに対し、31は直線状に口縁部に向けて立ち上がる。

把手（第11図32） 甕・甌などの大型製品の把手部分と思われる。

土師質土器（第11図33・34）

小壺（第11図33） 手づくね製の小壺。全体的の風化が激しく、調整等は不明。ミニチュア土器の可能性もある。

皿（第11図34） 皿形の土師質土器。底部は回転糸切り痕を持つが、全体的に風化が激しく、その他の調整等は不明である。

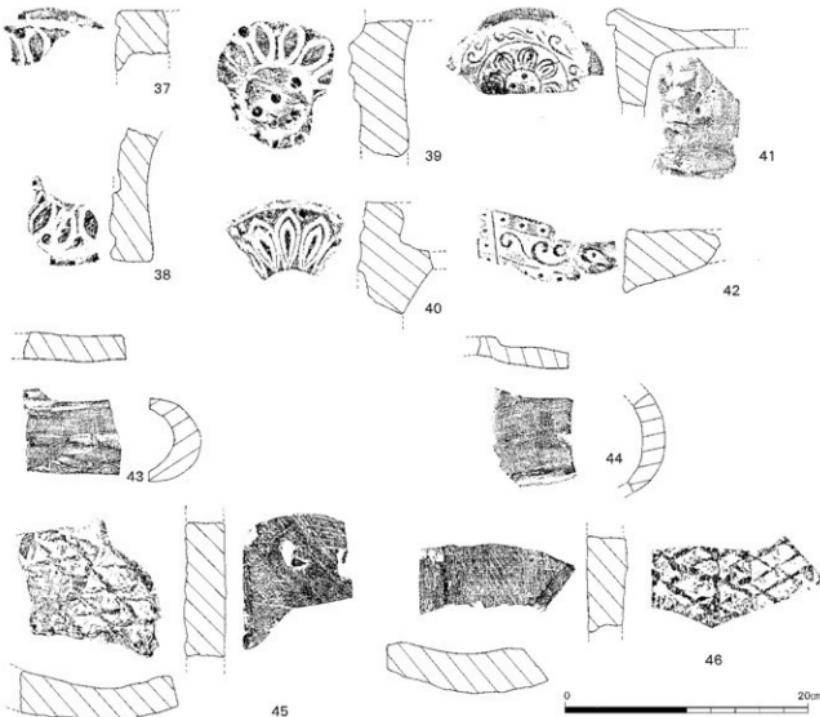
磁器（第11図35・36）

35は中国製の白磁碗の口縁部片。口唇部は玉縁状になっている。釉薬は透明釉がかかり、貫入が見られる。36は中国製の白磁碗の底部片。内側には全面に透明釉がかかっているが、外側の高台付近には釉薬がかかっていない。

瓦（第12図37～41）

37～41は軒丸瓦の瓦当部分。37～39は外区部分が無文で、間弁に珠文の痕跡が残る。蓮弁は紡錘形を呈し、中房部は半球状に盛り上がる（38・39）。蓮子は痕跡から1+6が想定される。裏面に指頭

圧痕が残る。39の中房部には范傷痕が明確に残っている。40は間弁に珠文の痕跡が残り、蓮弁は紡錘形を呈するが、蓮弁間に隙間がない。痕跡から丸瓦部との取り付きは上部で、はめ込み式の形状になっている。41はやや小振りで外区内縁に唐草文を配し、蓮弁を二重突線で表現する。蓮子は痕跡から1 + 4が想定される。丸瓦部の凹面に布目痕が残るが模骨痕は見られない。また成形途中につけられたと思われる指頭圧痕も明確に残る。凸面にも指でナデしたような痕跡や指頭圧痕が残る。42は軒平瓦の瓦当部分。上下脇区に珠文を配置し、内区には均整唐草文様を描く。頸部は曲線顎を呈し、凹面には布目痕があるものの、模骨痕は見られない。焼成が不十分でやや軟質であり、その他の調整等については不明である。43・44は丸瓦。43はやや小型化した行基式丸瓦で、凸面はケズリの後にナデ調整を施し、凹面には布目痕があるものの模骨痕がない。44は玉縁式丸瓦の玉縁部分。凹面に布目痕が残るが、模骨痕は見られない。45・46は隅瓦の切隅である。凸面に単位の大きい斜格子叩きを施し、凹面には布目痕が残るが、模骨痕は見られない。端部はきれいに面取りされている。

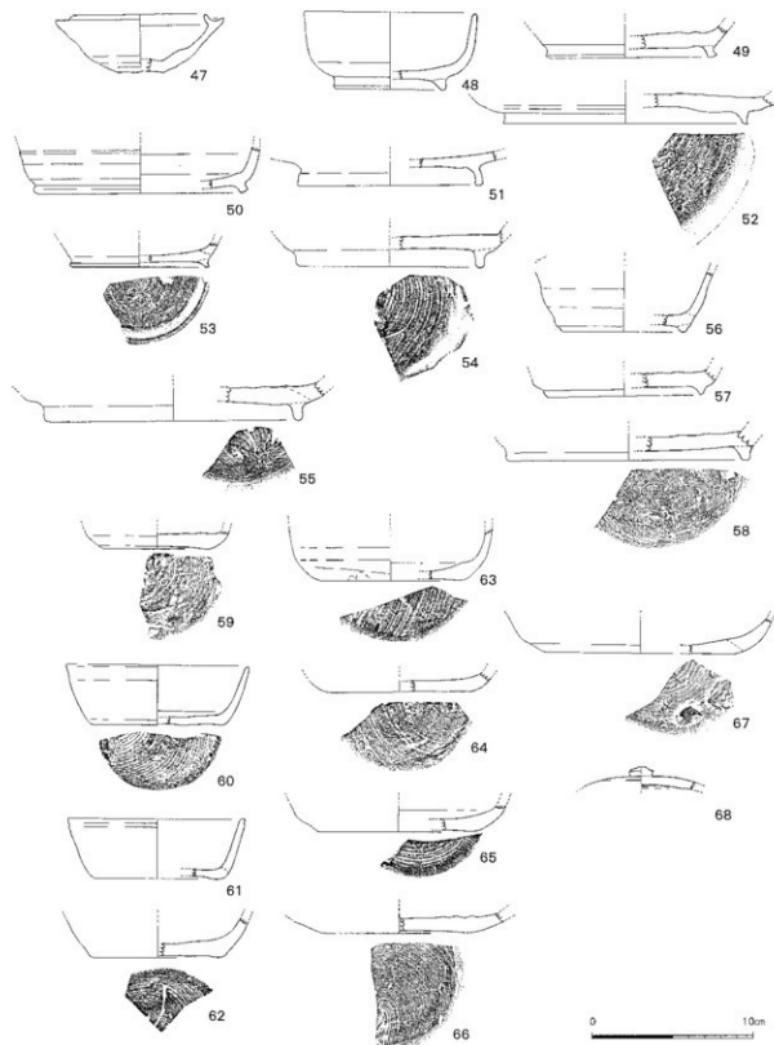


第12図 第1遺物包含層出土遺物 実測図 (2) (1/4)

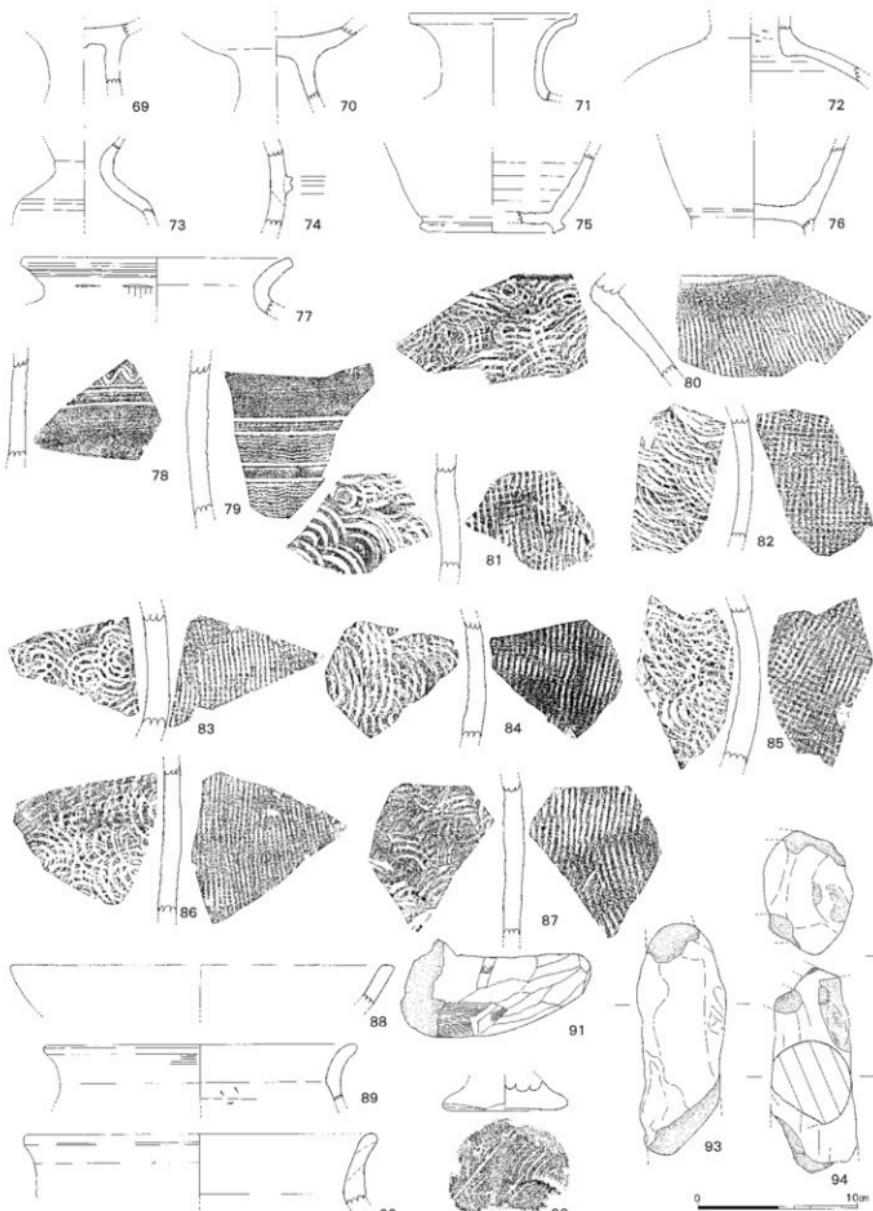
・第2遺物包含層 第13～16図は第6図第14層から出土した遺物である。

須恵器（第13～14図87）

壺（第13図47～67） 47は12と同じく古墳時代の系譜を引く壺の口縁部～底部片。受部・立ち上



第13図 第2遺物包含層出土遺物 実測図（1）(1/3)



第14図 第2遺物包含層出土遺物 実測図(2)(1/3)

がりとも短く、底部はやや平底気味である。底部付近はヘラ削りの痕跡を残し、胴部は回転ナデ調整を施す。口径は10.4cmと小型である。48～58は高台付帯の底部片。48は高台付近にヘラ削りの痕跡を残し、底部はヘラによる切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付けている。形状は高台付近から内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。49～51は底部をヘラによる切り離しの後、52～58は回転糸切りによる切り離しの後、再調整せず、高台を貼り付けている。

59～67は高台がつかない坏。底部が63は静止糸切りによる切り離し、それ以外が回転糸切りによる切り離しによるものである。胴部には回転ナデ調整が施される。

蓋（第13図68） 摺宝珠状のつまみがつく蓋。天井部はヘラ削りで成形され、内面は回転ナデ調整を施す。

高坏（第14図69・70） 高杯の坏部と脚部の縦日の部分。透かしなどは見られない。

壺（第14図71～76） 71は口縁部から頸部にかけての部分。口縁端部をつまみ上げたように屈曲して立ち上がる。72・73は頸部から肩部にかけての部分。回転ナデ調整を施す。74は胴部片。突帯をつけ、突帯上に沈線を、突帯の上下にカキ目を施す。75・76は底部～胴部にかけての部分。底部は切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付け、胴部には回転ナデ調整を施す。

壺（第14図77～87） 77は口縁部片。2条の沈線を施す。78・79は頸部片。78は2条の沈線と波状文を施す。79は2条の沈線を上下2ヵ所に、その間と下の沈線のさらに下側に波状文を施す。79～87は胴部片。外面は平行叩き、内面は同心円状當て具痕が残る。

土師器（第14図88～94）

鉢（第14図88） 大型の鉢形土器の口縁部片。内外面とも表面が粗く、風化している。

壺（第14図89・90） 両方とも口縁部片。頸部付近で若干屈曲しながら口縁部に向かって立ち上がる。ナデ調整を施す。

甑・甕（第14図91） 甑・甕などの大型製品の把手部分と考えられる。

土製支脚（第14図92～94） 92は底部片。回転糸切りによる切り離しが行われている。93・94は胴部片。

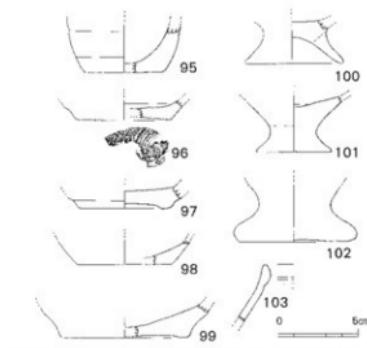
土師質土器（第15図95～102）

小壺（第15図95） 手づくね成形の小壺。ナデ調整を施している。

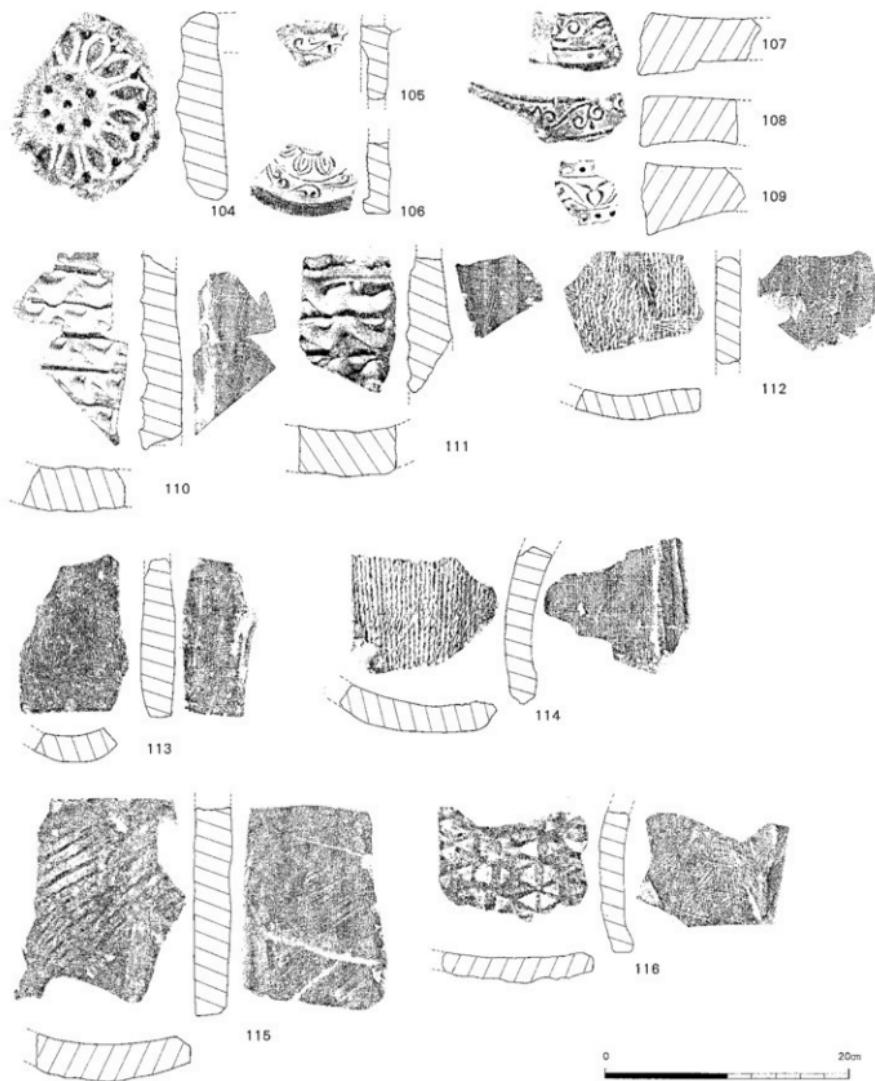
皿（第15図96～99） いずれも底部片。底部に回転糸切り痕を持つ。全体的に摩滅が激しく、調整等は不明。

低脚付皿（第15図100） 100は脚を薄く引き延ばした形状で、皿部は欠損している。

脚付皿形土器（第15図101・102） 101・102は底部が厚くなっている。全体的に摩滅が激しく調整等は不明である。



第15図 第2遺物包含層出土遺物 実測図(3)
(1/3)



第16図 第2遺物包含層出土遺物 実測図(4)(1/4)

磁器（第15図103）

中国製の白磁碗の口縁部片。口縁部が玉縁状になっており、その下に沈線を施す。

瓦（第16図104～116）

104～106は軒丸瓦の瓦当部分。104は紡錘形の連弁で、間弁に珠文を配し、中房部は半球形状に盛り上がる。蓮子は1+6で、范傷痕がある。丸瓦部との接合は痕跡からはめ込み式になっている。105・106は外区内面に唐草文を配する。107～111は軒平瓦の瓦当部分。107は下外区に珠文を、内区に均整唐草文を配する。頸部は段頸になっている。108は中区に均整唐草文を、中央飾りは3葉形を配置。頸部は曲線頸になっている。109は上下区に珠文を、中区の中央飾りは逆八の字形に開く葉形を配置している。頸部は曲線頸になっている。110・111は凸面に降帯をつけ、その間に波状文を施す。凹面には布目痕・模骨痕が残る。112～116は平瓦。112～114は凸面に直行する綱目痕を持ち、凹面に布目痕が残るが、模骨痕は見られない。端部は面取りされている。115は凸面が斜行する平行叩きで、凹面に布目痕が残るが、模骨痕は見られない。端部は面取りされている。116は凸面が鋸歯状叩きで、凹面に布目痕が残るが、模骨痕は見られない。端部は面取りされている。

・第3遺物包含層 第6図第15層から出土したものである（第17図）。

第15層からは少量の須恵器片や土師器片、石などが出土したが、図化できたものは以下の2点である。

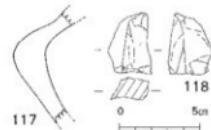
須恵器（第17図117）

甕の頸部片。屈曲した部分が厚く、口縁部の近くになるとやや細くなる。時期など詳細については不明である。

石（第17図118）

玉髓製の石。加工した痕跡は見られない。

これら以外にも石が数点出土したが、いずれも加工した痕跡は見られず、自然石と思われる。



第17図 第3遺物包含層出土遺物
実測図 (1/3)

第4章 小 結

今回の調査では、遺跡の限定された範囲の調査であり、削平や造成による擾乱もあったため、自然流路（S X - 0 1）以外に明確な遺構は検出できなかった。しかし、3層の遺物包含層を確認し、第1、第2包含層からは須恵器・土師器・瓦・土師質土器など、調査面積に比して大量の遺物を取上げる結果となった。以下、この包含層から出土した遺物を検討し、遺跡の性格について検証してみたい。（なお、第1包含層は第2包含層内の遺物を取り込んだ搅乱層と判断されるので、一括のものとして取り扱う。）

出土遺物の中で興味深いのは、山代郷北新造院跡（来美廃寺）と同類型の瓦が多数出土したことである。総数は962点を数え、総重量は81.97kgに及ぶ。これらの瓦について、来美廃寺出土の瓦の分類^{(5)・(6)}に準じ、出土個数を数えたものが別表1である。分類可能なものは312点であり、軒丸瓦11点、軒平瓦7点、平瓦271点、丸瓦20点と必然的ではあるが平瓦が主体となっている。概観すると、時期幅をもつ来美廃寺出土瓦の類型をある程度網羅するようであるが、ここで特筆されるのは、来美廃寺創建時（7世紀末～8世紀初）のものと考えられている類型の瓦が⁽⁵⁾軒瓦では数点出土しているものの（軒丸瓦Ⅲb類、軒平瓦Ⅰ類）、平瓦・丸瓦ではほとんど確認されていないことである（平瓦Ⅰ類、丸瓦Ⅰ類）。特に平瓦については、Ⅱa類の出土点数が来美廃寺本体の出土傾向と比較して異質に多く、分類不能な瓦が多いという要素を考慮しても、本遺跡を十分特徴付けるものと考えられる。

次に、その他の遺物について時期的な検討を述べる。まず、最も古いと思われるが第11図12、第13図47の須恵器壺と第11図26の須恵器高杯である。これらの遺物は来美廃寺でも出土しており（蓋杯H・G類）、⁽⁵⁾7世紀後半という実年代が想定されている。来美廃寺の創建時期（7世紀末～8世紀初）から考えて、寺院建設直前の時代、恐らくは寺院建設に携わった工人たちが使用したのではないかと考えられているものであるが、出土数は極めて少ない。次に、須恵器の壺類についてみると、7世紀末～9世紀後葉という年代幅のものが確認された。⁽⁷⁾なお、量的には8世紀中葉～9世紀後葉のものが大半を占めていた。これ以降の時期の遺物としては、土師質土器の皿や脚付皿形土器、また中国製の白磁碗があり、その形態から11世紀中葉～12世紀初頭の時期のものと判断される。⁽⁸⁾

以上のように、当遺跡の遺物の時期は7世紀後半～12世紀初頭におさまるものと考えられるが、この期間はまさしく来美廃寺の存続期間と推定されているものである。同類型の瓦出土をはじめ、当遺跡の出土遺物が来美廃寺と密接に関係していることは間違いない、これらの遺物の流出元があったであろう場所も来美廃寺に関連したものと推定される。

しかし、当遺跡の周辺地形は著しく改変されており、往時の景観を復元することは困難な状況である。当遺跡についても北側丘陵は大きく削平されており、おそらくここで検出された遺物の本来あつた場所もすでに削平を受けている可能性が高い。北側に来美廃寺本体が存在するため、そこからの流れ込みとは想像されるが、場所を限定できる要素も現状では確認できない。可能性としては来美廃寺の第4基壇がある平坦地、もしくはさらに下段、寺院中央を南北に通る参道西側をその候補地として想定しておきたい。

さて次に、この遺物包含層の流出源となった場所の性格について、その可能性を記述しておく。まず、単なる廃棄場であった可能性もあるが、来美廃寺の関連施設が廃絶した場所であったと想定した場合、今回の調査では来美廃寺で出土している仏具関係の土器が少なく、また鶴尾などの道具瓦が出土していない。このことは、消極的な要素ではあるが、その施設が宗教行事等を行った寺院本体の施設ではなく、僧房や政所などの周辺施設であった可能性を示唆するものと考えられる。また、その施設は、平瓦Ⅰ類をほとんど持たないことから、時期的に後出する施設、もしくは瓦を寺院本体とは使い分けられた施設であった可能性も考慮できよう。

以上、全容は不明といわざるをえないが、今回の調査で、今後の来美廃寺の周辺施設や周囲の景観を検証、復元するための、貴重な資料を得られたものと考えられる。

※瓦の名称に関しては 森郁夫『考古学ライブラリー43 瓦』の中の部分名称によった

註

- (1) 国立大学法人 島根大学総合理工学部地球資源学科 准教授 酒井哲弥氏のご教授による
- (2) (1)と同じ
- (3) (1)と同じ
- (4) (1)と同じ
- (5)『来美廃寺 「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』島根県教育委員会 2002年
- (6)『山代郷北新造院跡 史跡出雲國山代郷遺跡群北新造院跡(米美廃寺)発掘調査報告書』島根県教育委員会
2007年
- (7)柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古 第3集』松江考古学講話会 1980年
※上記の編年を参考に、本遺跡の須恵器高台付坏の時期については以下のように考えている。
 - (1)ヘラによる切り離し、その後ナデ調整を施し、高台を貼り付ける。(第11図13、14ほか)
— 第3式以前で、高台が低いことから第2式に当たる。(7世紀末～8世紀前葉)
 - (2)回転糸切りで切り離し、その後ナデ調整を施し、高台を貼り付ける。(第11図15～18ほか)
— 回転糸切りの技法が導入される第3式(8世紀中葉)
 - (3)回転糸切りで切り離し、その後再調整せず、そのまま高台を貼り付ける。(第13図56、58ほか)
— 切り離し後、再調整を行わない第4式(8世紀後葉～9世紀後葉)
- (8)横田賀次郎・森田勉「大宰府の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集 第4集』九州歴史資料館 1978年

別表1 出土瓦分類別計測表

	13層		14層		層位不明		計		
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	
軒丸瓦	I類								
	II類								
	IIIa類								
	IIIb類	2	1.04	1	0.63	3	0.63	6	2.30
	IVa類	1	0.41					1	0.41
	IVb類								
軒平瓦	V類	1	0.66			3	0.35	4	1.01
	計	4	2.11	1	0.63	6	0.98	11	3.72
軒平瓦	I類			2	0.71	1	0.19	3	0.90
	II類			1	0.34			1	0.34
	III類			1	0.70			1	0.70
	IV類	1	0.30	1	0.16			2	0.46
平瓦	計	1	0.30	5	1.91	1	0.19	7	2.40
	I類	2	0.51	3	0.42			5	0.93
	IIa類	14	3.87	25	4.04	2	0.59	41	8.50
	IIb類								
	III類	5	0.71	10	1.83	2	0.31	17	2.85
	IVa類	37	4.40	52	7.54	10	1.10	99	13.04
	IVb類	1	0.29	6	0.46	2	0.65	9	1.40
	V類	2	0.31	1	0.23			3	0.54
	VI類								
	VII類	13	1.54	30	2.46	7	0.89	50	4.89
	VIII類	7	1.43	10	1.40			17	2.83
	IX類	1	0.08	3	1.58			4	1.66
	X類	13	2.44	11	2.02			24	4.46
	XI類								
	XII類								
	鰐歯状	1	0.31	2	0.42	1	0.22	1	0.95
	須恵器			1	0.04			1	0.04
	計	96	15.89	154	22.44	24	3.76	274	42.09
丸瓦	I類								
	II類			1	0.18			1	0.18
	III類	1	0.31					1	0.31
	IV類								
	Va類								
	Vb類								
	VI類	8	0.95	3	0.55	1	0.19	12	1.69
	VIIa類	1	0.21					1	0.21
	VIIb類								
	玉縁	2	0.30	2	1.13	1	0.12	5	1.55
	平行叩								
計	12	1.77	6	1.86	2	0.31	20	3.94	

<分類不能の瓦>

	13層		14層		層位不明		計	
	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)	個数	重量(kg)
軒丸瓦	2	0.11					2	0.11
軒平瓦	1	0.06					1	0.06
平瓦	224	14.87	345	19.59	45	3.77	614	38.23
丸瓦	8	0.41	22	1.43	3	0.52	33	2.36
計	235	15.45	367	21.02	48	4.29	650	40.76

*層位不明に関しては、13層・14層のいづれかの出土の区別がつかなかったものや試掘調査の分が含まれる。

別表2 出土遺物一覧表

地図番号	図版番号	分類	器種	部位	出土場所	出土層位	法盤（cm）	胎土：色調：焼成	形態：調整：手法等	備考
9-1	図版7	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	T-3		口径：13.8 底径：9.0 器高：4.6	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	脚部下はヘラケズリ、底部はヘラ切りの後、ナデ調整を施し高台を貼り付ける	
9-2	—	須恵器	壺	胴部	T-3		--	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	外縁は平行叩き痕、内面は同心円状當て具痕	
9-3	図版7	須恵器	壺	底部	T-6		底径：8.3	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色（外）赤茶色（内） 焼成：良好	底部回転糸切り、内外面回転ナデ調整を施す	
9-4	図版7	十輪骨 土器	三	底部	T-6		底径：5.4	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：赤褐色 焼成：やや不良 軟質	全体的に摩滅が激しく、調整等は不明	
9-5	図版7	須恵器	高台付坏	底部	T-7		底径：12.2	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	底部は回転糸切りの後にナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
9-6	図版7	須恵器	壺	口縁部～底部	T-7		口径：9.8 底径：8.0 器高：2.9	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	底部回転糸切り？内外面回転ナデ調整を施す	
9-7	図版7	壺	壺	口縁部	T-7		--	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：淡黄色 焼成：良好	口縁部が玉縁状 貫入あり	白磁IV類
9-8	図版7	須恵器	壺	口縁部～底部	T-8		口径：11.4 底径：7.9 器高：4.3	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色（外）赤茶色（内） 焼成：良好	底部回転糸切り、内外面回転ナデ調整	
10-9	図版7	瓦	軒丸瓦	瓦当	T-7		直径：9.3	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青白色 焼成：やや不良 軟質	邊子は1+6、間弁あり	軒丸瓦Ⅲ類
10-10	図版7	瓦	軒平瓦	—	T-7		--	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：良好	凸面に施帶、凹面に横貫痕 全体的に摩滅が激しい	平瓦I類
10-11	図版7	瓦	平瓦	—	T-7		--	胎土：2~3mm前後の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	凸面は直行する縞目痕、凹面は布目痕が残るが、横貫痕がない	平瓦IVa類
11-12	図版7	須恵器	壺	口縁部～底部	13層		口径：9.4 底径：5.4 器高：3.7	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	内外面回転ナデを施す	
11-13	図版7	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	13層		口径：10.2 底径：8.0 器高：3.8	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	底部をヘラ切りの後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-14	図版7	須恵器	高台付坏	底部	13層		底径：13.2	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部をヘラ切りの後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-15	図版7	須恵器	高台付坏	底部	13層		底径：8.9	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	底部切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-16	図版7	須恵器	高台付坏	底部	13層		底径：8.8	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-17	図版7	須恵器	高台付坏	底部	13層		底径：12.1	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青色 焼成：良好	底部切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-18	図版7	須恵器	高台付坏	底部	13層		底径：10.8	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼り付ける	
11-19	図版7	須恵器	壺	底部	13層		底径：7.6	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整を施す	
11-20	図版7	須恵器	壺	底部	13層		底径：8.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整を施す	
11-21	図版7	須恵器	盖	口縁部～底部	13層		口径：14.0 底径：12.8 器高：2.1	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	底部回転糸切り 回転ナデ調整	
11-22	図版8	須恵器	蓋	天井部	13層		--	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	ヘラによる切り離し後、天井部はナデ調整を施す	
11-23	図版8	須恵器	蓋	天井部	13層		--	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	ヘラによる切り離し後、天井部はナデ調整を施す	

種類 番号	園版 番号	分類	器種	部位	出土地點 出土地位	法量 (cm)	胎土：色調：焼成	形態：調整：手法等	備考
11-24	園版 8	須恵器	蓋	天井部 口縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	ヘラによる切り離し後、大井部はナダ調整を施す。口縁端部は断面三角形を呈す	
11-25	園版 8	須恵器	蓋	口縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	口縁端部は断面三角形を呈す	
11-26	園版 8	須恵器	高环	縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	脚部に切り目状の透かしを持つ	
11-27	園版 8	須恵器	裏	縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：赤灰色 焼成：良好	2条の沈縫と波状文を施す	
11-28	園版 8	須恵器	裏	胴部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	外面は平行叩き底、内面は同心円状當て具瓶	
11-29	園版 8	須恵器	裏	胴部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰色 焼成：良好	外面は平行叩き底、内面は同心円状當て具瓶	
11-30	園版 8	土師器	裏	口縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：黄灰色 焼成：良好	頭部が屈曲している	
11-31	園版 8	土師器	裏	口縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：黄灰色 焼成：良好	口縁部に向けて外側に直線状に立ち上がる	
11-32	—	土師器	—	把手	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：黄灰色 焼成：良好	—	
11-33	園版 8	土師器	小砾	底部	13層	底径：5.6	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：黄灰色 焼成：良好	—	ミニチュア土器？
11-34	園版 8	土師質 土器	皿	底部～ 口縁部	13層	底径：0.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：黄灰色 焼成：やや軟質	底部回転糸切り	
11-35	園版 8	磁器	碗	口縁部	13層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：淡緑色 焼成：良好	口縁部が卡縁状 瓢入あり	白磁IV類
11-36	園版 8	磁器	碗	底部	13層	底径：7.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：良好	外側高台付近には釉薬がかっていなない	白磁IV類
12-37	園版 8	瓦	軒丸瓦	瓦当	13層	直径：19.0	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良 軟質	外区は無文 間弁に珠文の痕跡	軒丸瓦 IIIb類
12-38	園版 8	瓦	軒丸瓦	瓦当	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良 軟質	外区は無文 間弁に珠文の痕跡 軒丸瓦の差分	軒丸瓦 IIIb類
12-39	園版 8	瓦	軒丸瓦	瓦当	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良 軟質	外区は無文 間弁に珠文の痕跡 軒丸瓦の連弁 連子は1~6	軒丸瓦 IIIb類
12-40	園版 8	瓦	軒丸瓦	瓦当	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	間弁に珠文の痕跡 新蓮形の連弁 連子間に隠窓がない	軒丸瓦 IVa類
12-41	園版 8	瓦	軒丸瓦	瓦当	13層	底径：15.0	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	外区に唐草文を配し、内区に二重突継で連弁を表現 連子は1~4	軒丸瓦 V類
12-42	園版 8	瓦	軒平瓦	瓦当	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良 軟質	上下輪瓦に珠文を配置 内区は均整輪草文様 剥離部は直線状	軒平瓦 IV類
12-43	園版 8	瓦	丸瓦	—	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良 軟質	やや小型化した行基式丸瓦	丸瓦 Vla類
12-44	園版 8	瓦	丸瓦	卡縫	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凹面に布目痕が残る	玉器式 丸瓦
12-45	園版 8	瓦	平瓦	隅切	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凸面は単位の大さな斜格子叩き 凹面は横骨痕がない	平瓦X類
12-46	園版 8	瓦	平瓦	隅切	13層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凸面は単位の大きな斜格子叩き 凹面は横骨痕がない	平瓦X類
13-47	園版 9	須恵器	环	口縁部 ～底部	14層	口径：10.4 底径：2.8 高さ：3.6	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：青灰色 焼成：良好	ヘラ削りの後、ナダ調整を施す	

探査番号	回転番号	分類	器種	部位	出土土地点 出土層位	法量(cm)	胎土: 色調: 焼成	形態: 調整: 手法等	備考
13-48	回版9	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	14層	口径: 10.8 底径: 6.7 器高: 4.8	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 灰色 焼成: 良好	回転ナデ調整を施す	
13-49	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 11.9	胎土: 1mm以下前後の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	ヘラによる切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼付ける。	
13-50	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 12.5	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 灰色 焼成: 良や軟質	ヘラによる切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼付ける。	
13-51	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 11.4	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	ヘラによる切り離し後、ナデ調整を施し、高台を貼付ける。	
13-52	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 15.2	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部を回転糸切りによる切り離し後、再調整せず、高台を貼付ける 脚部は回転ナデ調整を施す。	
13-53	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 8.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 暗灰色 焼成: 良好	底部を回転糸切りによる切り離し後、再調整せず、高台を貼付ける 脚部は山毛ナデ調整を施す	
13-54	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 11.8	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 暗灰色 焼成: 良好	底部を回転糸切りによる切り離し後、再調整せず、高台を貼付ける 脚部は回転ナデ調整を施す	
13-55	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 16.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部を回転糸切りによる切り離し後、再調整せず、高台を貼付ける 脚部は回転ナデ調整を施す	
13-56	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 7.8	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 暗青灰色 焼成: 良好	底部を回転糸切りによる切り離し後、再調整せず、高台を貼付ける 脚部は山毛ナデ調整を施す	
13-57	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 10.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 白灰色 焼成: 良や軟質	切り離し後、高台を貼付け 黒化により詳細不明	
13-58	回版9	須恵器	高台付坏	底部	14層	底径: 15.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	回転糸切りによる切り離し後、再 調整せず、高台を貼付ける 脚部は回転ナデ調整を施す	
13-59	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 6.5	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-60	回版9	須恵器	坏	口縁部～底部	14層	口径: 11.4 底径: 8.2 器高: 3.7	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-61	回版9	須恵器	坏	口縁部～底部	14層	口径: 11.0 底径: 7.8 器高: 3.7	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 暗灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-62	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 8.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-63	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 0.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-64	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 9.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-65	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 10.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-66	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 8.6	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-67	回版9	須恵器	坏	底部	14層	底径: 11.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部回転糸切り 脚部に回転ナデ調整施す	
13-68	回版9	須恵器	壺	天井部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 灰色 焼成: 良好	大井部ヘラケズリ	
14-69	回版10	須恵器	高杯	縁部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 灰色 焼成: 良好	回転ナデ調整を施す	
14-70	回版10	須恵器	高杯	縁部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: にい赤褐色 焼成: 良好	回転ナデ調整を施す	
14-71	回版10	須恵器	壺	口縁部～底部	14層	口径: 10.5	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	口縁部を畳曲させ、つまみ上げる	

博団 番号	図版 番号	分類	器種	部位	出土地点 出土層位	法量 (cm)	胎土: 色調: 焼成	形態: 構造: 手法等	備考
14-72	図版 10	須恵器	壺	頸部～ 肩部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	回転ナデ調整を施す	
14-73	図版 10	須恵器	壺	頸部～ 肩部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	回転ナデ調整を施す	
14-74	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	尖端を貼付け、その上に沈線を施す 突起文の上下のカキ目をつける	
14-75	図版 10	須恵器	壺	底部～ 胴部	14層	底径: 9.0	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部をヘラによる切り離し後、ナ デ調整を施し高台を貼付ける 同時に回転ナデ調整を施す	
14-76	図版 10	須恵器	壺	底部～ 胴部	14層	底径: 7.5	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	底部をヘラによる切り離し後、ナ デ調整を施し高台を貼付ける 同時に回転ナデ調整を施す	
14-77	図版 10	須恵器	壺	口縁部	14層	口径: 16.9	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	2条の沈線を施す
14-78	図版 10	須恵器	壺	頸部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	2条の沈線と波状文を施す	
14-79	図版 10	須恵器	壺	頸部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	2条の沈線を上下に配し、その間 と下側の沈線のさらに下側に波状 文を施す	
14-80	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-81	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-82	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-83	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-84	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-85	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-86	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-87	図版 10	須恵器	壺	胴部	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 青灰色 焼成: 良好	外面は平行叩き痕、内面は同心円 状当て具痕	
14-88	図版 10	土師器	鉢	口縁部	14層	口径: 24.0	胎土: 2～3mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: 良好	—	スガ 付着
14-89	図版 10	土師器	鉢	口縁部	14層	底径: 19.4	胎土: 1mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: やや不良	ナデ調整を施す	
14-90	図版 10	土師器	鉢	口縁部	14層	口径: 21.6	胎土: 2～3mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: 良好	ナデ調整を施す	スガ 付着
14-91	--	土師器	手	把手	14層	—	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: やや不良	—	
14-92	図版 10	土師器	十脚支脚	底部	14層	底径: 7.8	胎土: 2～3mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: やや不良	底部凹板糸切り	
14-93	--	土師器	十脚支脚	胴部	14層	—	胎土: 1mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: 良好	—	
14-94	--	土師器	土製支脚	胴部	14層	—	胎土: 1mm前後の砂粒を含む 色調: 黄褐色 焼成: 良好	—	
15-95	図版 11	土師器	小瓶	底部～ 胴部	14層	底径: 4.8	胎土: 1mm以下の砂粒を含む 色調: 棕褐色 焼成: やや不良	手づくね成形	ミニチュア 土器?

辨認番号	図版番号	分類	器種	部位	出土場所 出土層位	法墨 (cm)	胎土：色調：焼成	形態：調整：手法等	備考
15-96	図版11	土師質土器	壺	底部	14層	底径：6.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：褐色 焼成：やや不良	底部回転糸切り	
15-97	図版11	土師質土器	壺	底部	14層	底径：5.8	胎土：1～3mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：良	底部回転糸切り？全体的に摩滅が 激しい	
15-98	図版11	土師質土器	壺	底部	14層	底径：6.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰白色 焼成：やや不良	底部回転糸切り？全体的に摩滅が 激しい	
15-99	図版11	土師質土器	壺	底部	14層	底径：7.8	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：灰白色 焼成：やや不良	底部回転糸切り？全体的に摩滅が 激しい	
15-100	図版11	土師質土器	低脚付壺	底部	14層	底径：6.2	胎土：1～2mm前後の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：やや不良	風化・摩滅が激しい	
15-101	図版11	土師質土器	脚付皿形土器	底部	14層	底径：4.7	胎土：2～3mm前後の砂粒を含む 色調：褐色 焼成：やや不良	底部回転糸切り？全体的に摩滅が 激しい	
15-102	図版11	土師質土器	脚付皿形土器	底部	14層	底径：7.8	胎土：1～2mm前後の砂粒を含む 色調：灰褐色 焼成：やや不良	底部回転糸切り？全体的に摩滅が 激しい	
15-103	—	磁器	碗	口縁部	14層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：乳白色 焼成：良好	口縁部が工縫状 その下に沈線	
15-104	図版11	瓦	軒丸瓦	瓦当	11層	直径：15.0	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡褐色 焼成：良	筋縫形の溝穿で、両方に珠文を配する 中央部の連子は1+6、左側 傷痕がある	軒丸瓦 III類
15-105	図版11	瓦	軒丸瓦	瓦当	14層	直径：9.4	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	外区分内面に唐草文を配する	軒丸瓦 V類
15-106	図版11	瓦	軒丸瓦	瓦当	14層	直径：15.0	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗褐色 焼成：良好	外区分内面に唐草文を配する	軒丸瓦 V類
15-107	図版11	瓦	軒平瓦	瓦当	14層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡褐色 焼成：良	下外区に珠文、中区は均塗唐草文様を配する 領部は段模	軒平瓦 II類
15-108	図版11	瓦	軒平瓦	瓦当	14層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡褐色 焼成：良	中区に均塗唐草文様、中央飾りに3葉形を配置 領部は曲頭彫	軒平瓦 III類
15-109	—	瓦	軒平瓦	瓦当	14層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：淡褐色 焼成：良	上下区に珠文を配し、中区の中央 飾りは逆八の字形に開く変形をしている	軒平瓦 IV類
15-110	図版11	瓦	軒平瓦	平瓦	14層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良	凸面は隆脊+波状文 回面は模骨 瓶がある	軒平瓦 Ia類
15-111	図版11	瓦	軒平瓦	平瓦	11層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凸面は隆脊+波状文 回面は横骨 瓶がある	軒平瓦 I類
15-112	図版11	瓦	平瓦	—	14層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凸面は直行する縦目痕、凹面は布 目痕が残るが、横骨痕がない	平瓦 IVa類
15-113	図版11	瓦	平瓦	—	14層	—	胎土：1～2mm前後の砂粒を含む 色調：灰褐色 焼成：良	凸面は直行する縦目痕、凹面は布 目痕が残るが、横骨痕がない	平瓦 IVa類
15-114	図版11	瓦	平瓦	—	14層	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	凸面は直行する縦目痕、凹面は布 目痕が残るが、横骨痕がない	平瓦 IVa類
15-115	図版11	瓦	平瓦	—	14層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：淡白色 焼成：良	凸面に斜行する平行叩き、凹面に布 目痕が残るが横骨痕がない	平瓦 IX類
15-116	図版11	瓦	平瓦	—	14層	—	胎土：1mm以下の砂粒を含む 色調：白色 焼成：良	凸面に鋸齒状叩きが、凹面に布 目痕が残るが横骨痕がない	鋸齒状 叩き
15-117	—	渠頭路	甕	頸部	SX-91 窓十中	—	胎土：1mm前後の砂粒を含む 色調：暗灰色 焼成：良好	—	
15-118	—	石	—	—	SX-91 窓十中	—	—	—	



調査前全景（南西から） 右上の方向に来美庵寺が位置する



調査前全景（北東から） 左上に見えるのは茶臼山

図版2



遺物出土状況（軒平瓦）



遺物出土状況（軒丸瓦）



遺物出土状況（須恵器・軒平瓦）

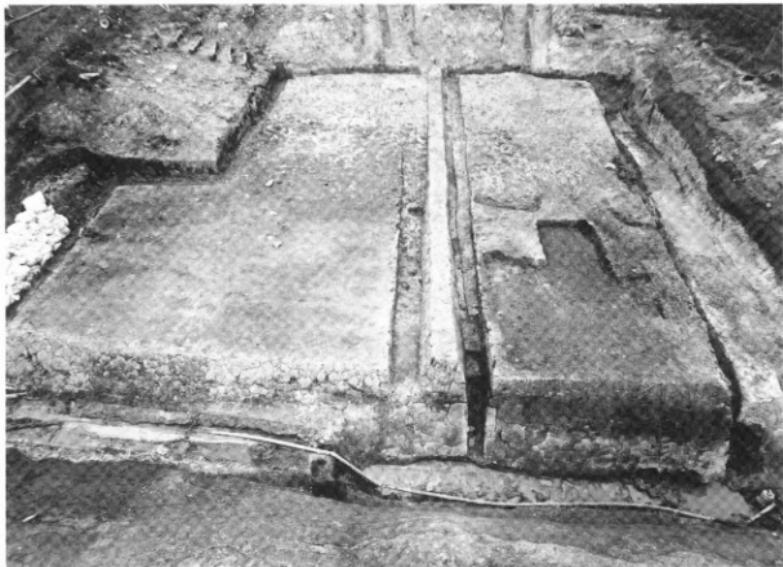


東壁土層断面（西側から）

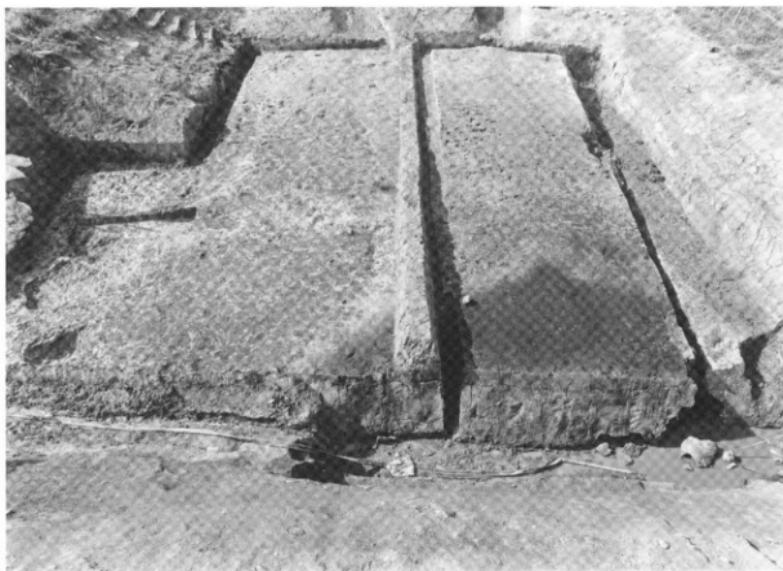


南壁土層断面（西側から）

図版 4



第1 遺物包含層除去後（南側から）



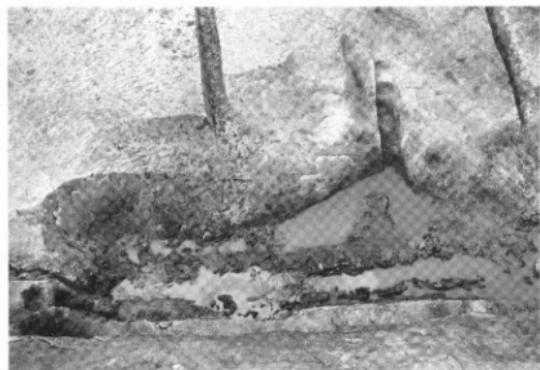
第2 遺物包含層除去後（南側から）



S X - 0 1 検出状況（南側から）

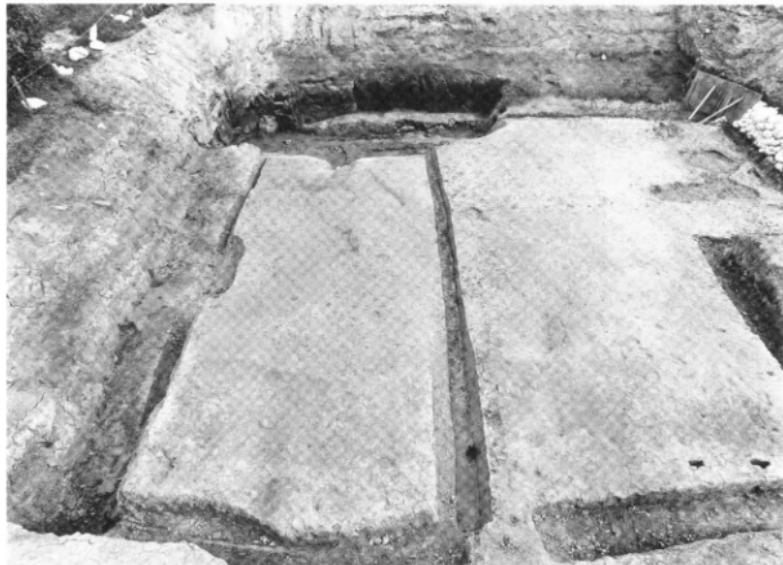


S X - 0 1 土層断面（東側から）

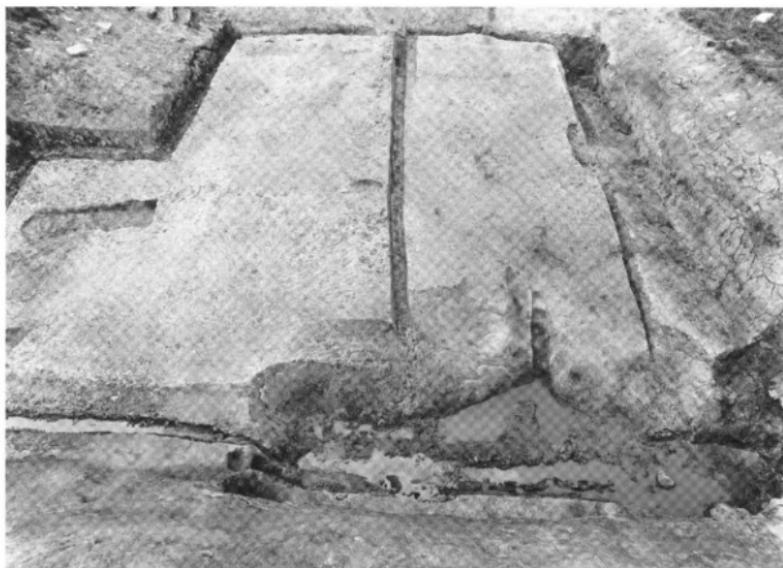


S X - 0 1 完掘状況（南側から）

図版 6

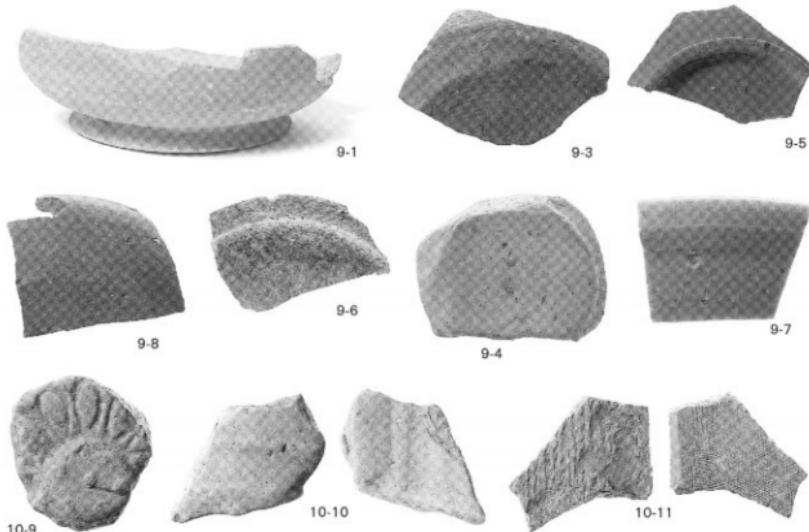


完掘状況（北側から）

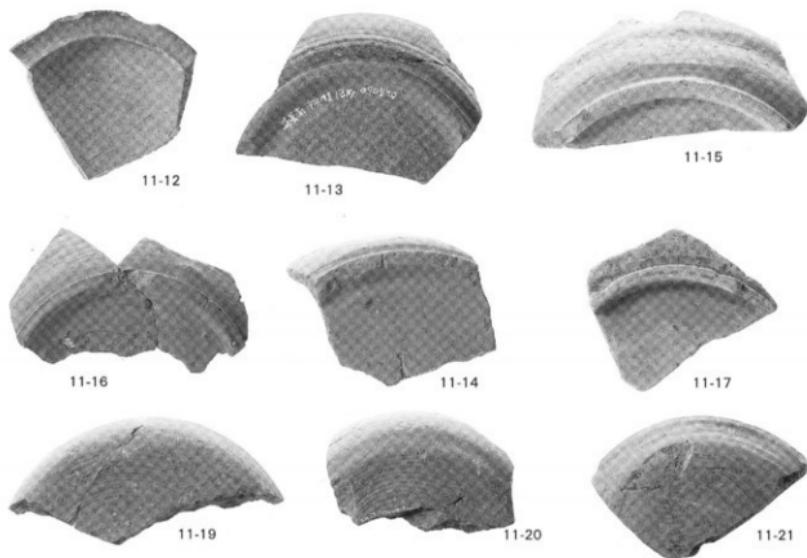


完掘状況（南側から）

図版 7

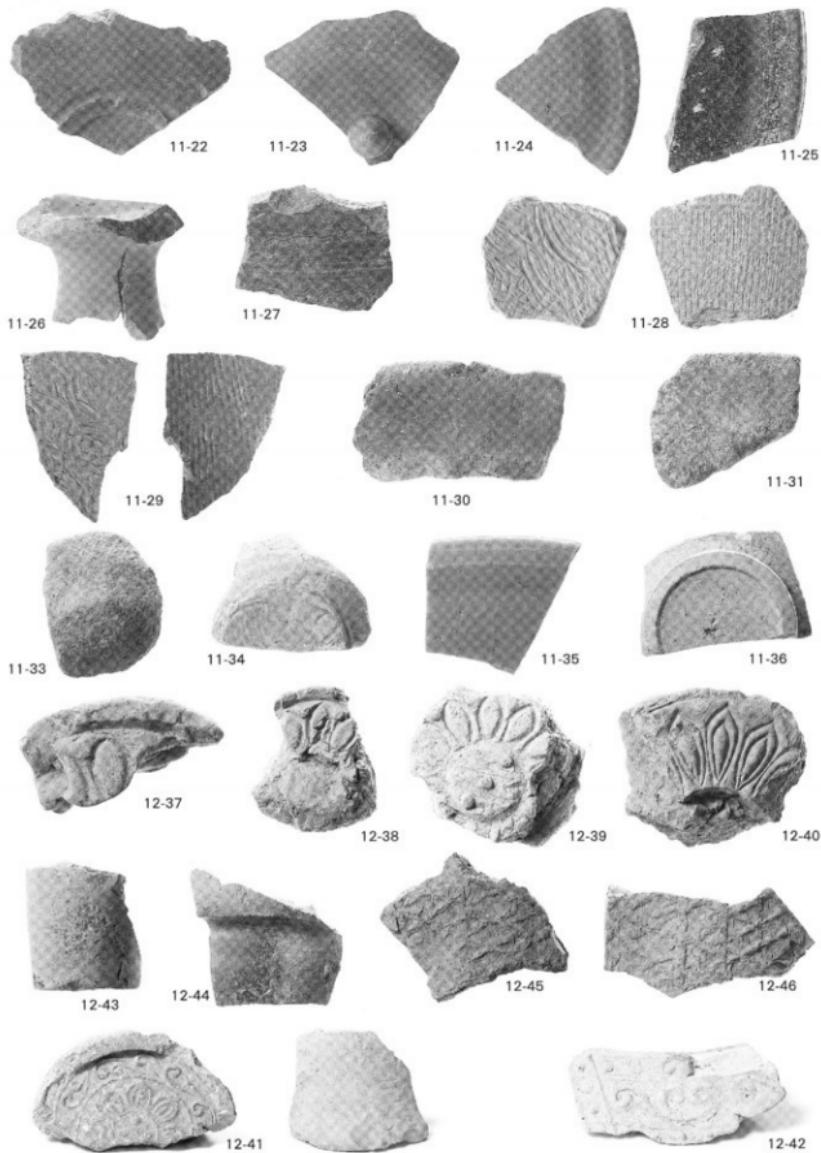


試掘調査時 出土遺物

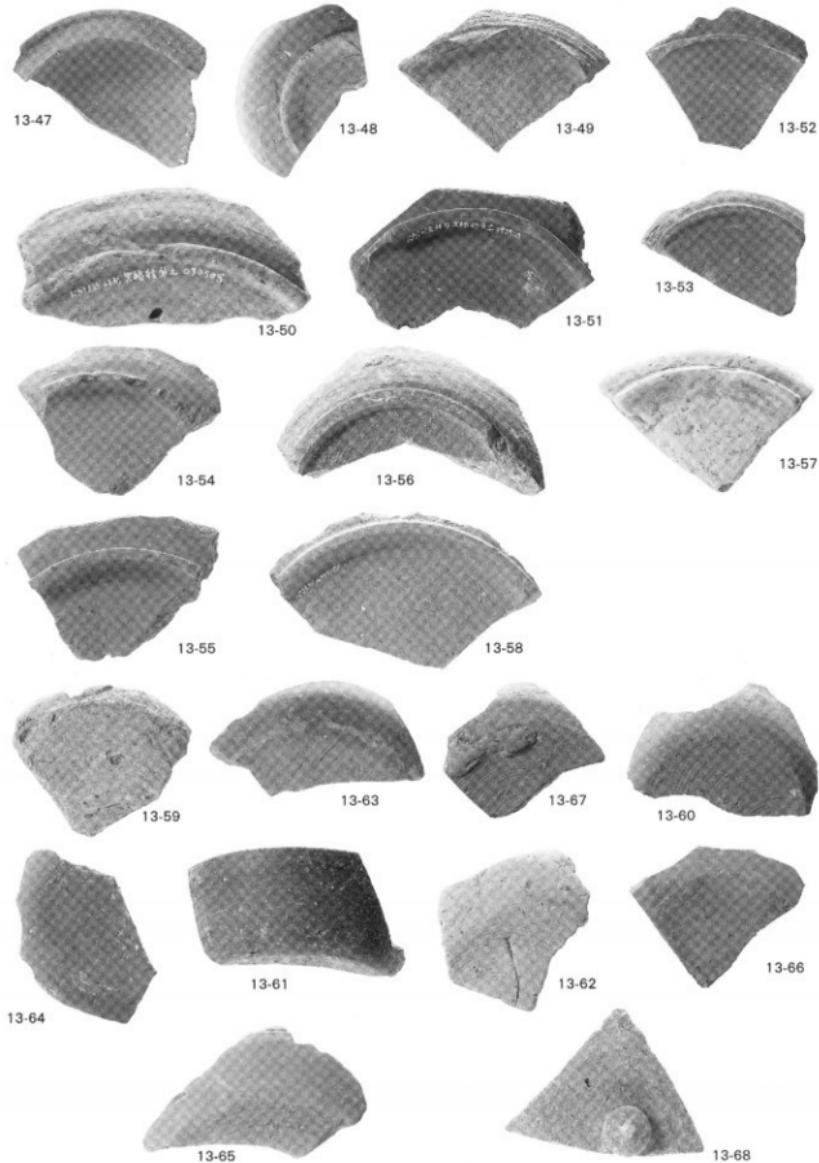


第1 遺物包含層出土遺物 (1)

図版 8

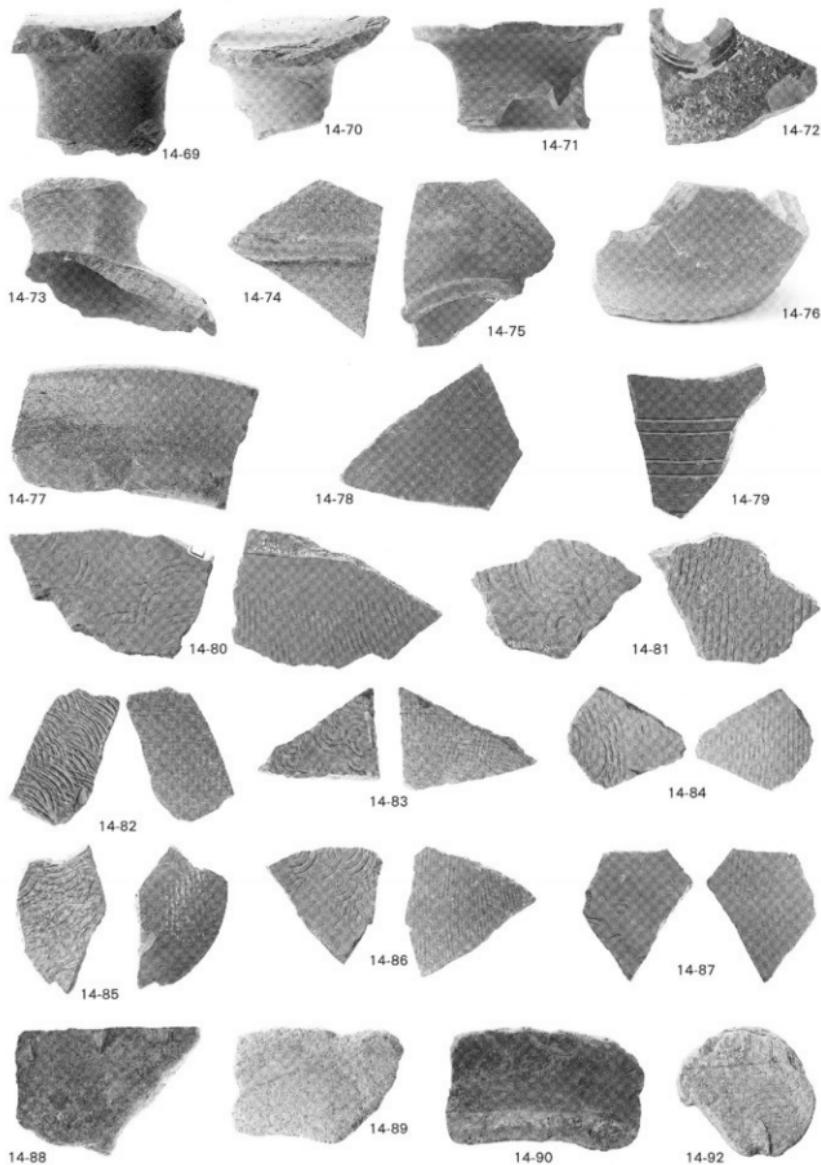


第1遺物包含層出土遺物（2）



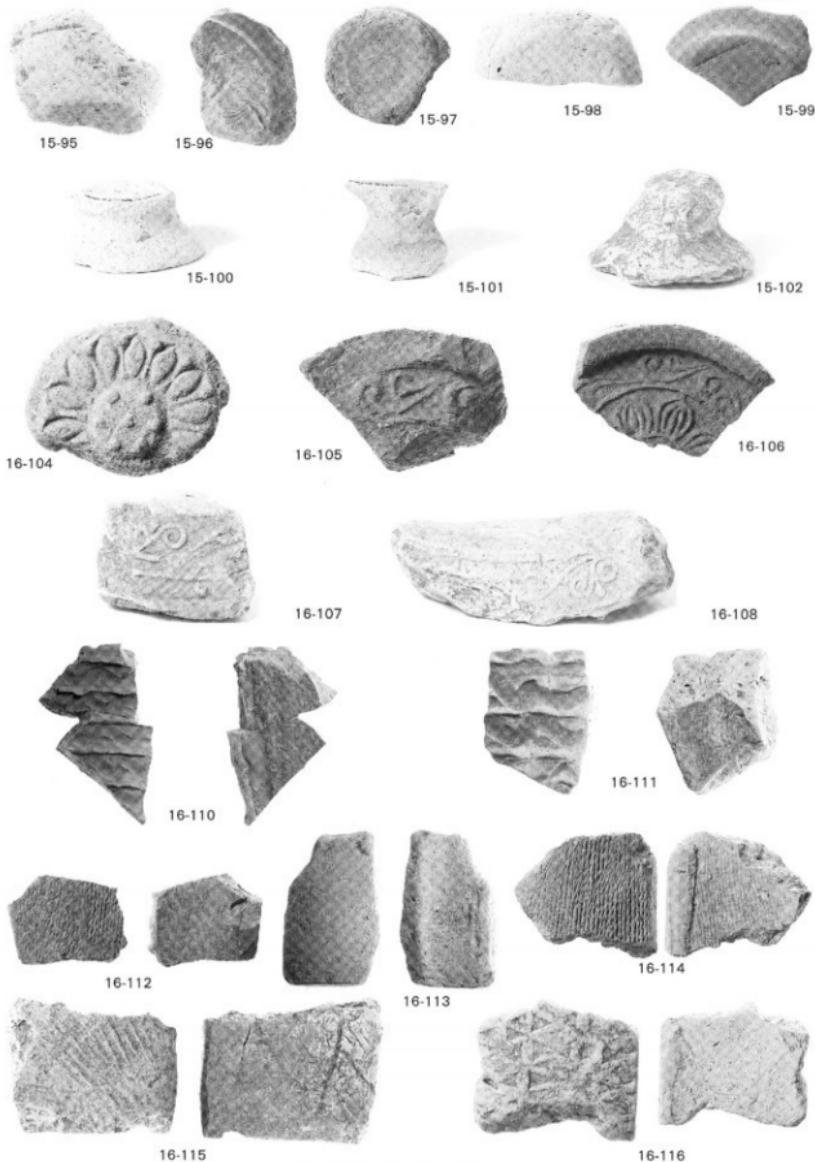
第2遺物包含層出土遺物（1）

図版10



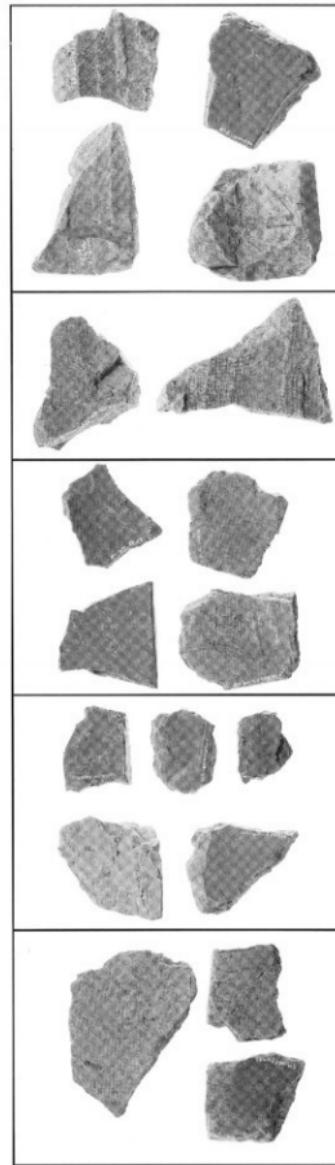
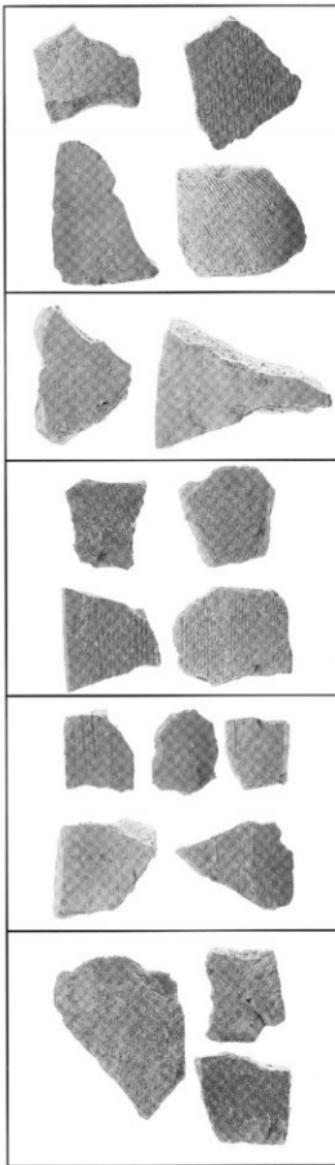
第2遺物包含層出土遺物（2）

圖版11



第2遺物包含層出土遺物（3）

図版12



第Ⅱa類

第Ⅲ類

第Ⅳa類

第Ⅶ類

第Ⅷ類

分類別出土平瓦（実測図未掲載資料）

報告書抄録

ふりがな	くるみみなみいせき							
書名	来美南遺跡							
副書名	山代住宅新築工事に伴う発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	石川 崇・徳永 隆							
編集機関	松江市教育委員会							
	財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL 0852(55)5284							
	〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1番地 TEL 0852(85)9210							
発行年月日	2009年8月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くるみみなみいせき 来美南遺跡	島根県 松江市 山代町 字来美 698-1番地	32201	D-1081	35° 26' 30'	130° 23' 34'	20090415 20090529	156m ²	住宅工事
所収遺跡名	各種別	主な時代		主な遺構	主な遺跡		特記事項	
来美南遺跡	散布地	奈良時代～平安時代		なし	須恵器・土師器・瓦 ・上質土器など		来美庵寺に関連した遺物	

松江市文化財調査報告書 第127集

来美南遺跡

2009年8月

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限会社